
自由人、finalarwin!!

exlegion

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由人、final arwin!!!

【NZコード】

N5134P

【作者名】

exlegion

【あらすじ】

ある日、

“力”を手に入れた
少年がいた。

これはそんな少年の……

いや1人の

自由人の物語 · · · · ·

チラチラ・・・・

「ん? どうしたの? や
お嬢ちゃん? 」

そんな所で立ってて

「・・・・・・・・

(エクシ)

「ほつほつほ・・・・

安心なさい。

ここはワシの嫁じや
それにしてもお嬢ちゃんは
どうして

「ここらの女のかの? 」

「……」とは家の形が似ていた
から間違えたじゃろ?」

「・・・・・」(ハクン)」

「そんな所に立つてないで
うちにいで、

こんな小さなお客様が
来るのははじめてじゃ
・・

卷之二十一

バサツ

「・・・・・（ビクシ）」

「おや、驚かせてしまつた
かのう

卷之三

スツ
・
・
・
・

「おお、拾つてくれて
ありがとうのう。」

「…………

「いや、、、なこ、」

「お嬢お嬢ちゃんは本を見る
のははじめてかの。」

「昔はこいつちひに紙に
書かれていた本をよく
読んでいたのじゅう
読んでもうじゅう

「…………

「どんなお話なの？」

「ん、聞いてみたいかの？
それじゅあ、お茶と
お菓子を持つてくるから
そしたら
読んであげようかの」

「…………」

「これは今からお嬢お嬢ちゃんの
何世代前に
ある少年の身に起つた
お話しじゅうやく…………」

その日は雨が降っていた。

無理もない。

季節は梅雨、

日本はこの時期は

雨ばかりだ。

ここはとある中学校、

時間的には授業も全てが終わり、部活動に参加していた生徒達もその殆どが帰ってしまっていた。

その中学校の登校口に一人の少年が佇んでいた。

少年は細身・・・

ではなくて、体格は少しガッシリしていた。

肩幅は広く鳩胸であるため柔道をやっていると彼が言つても信じてもらえるだらう。

そんな少年であるが、彼は登校口で立ち往生していた。

少年は自転車通学だった。

当然、この時期は

雨合羽は必需品だったのだが、・・・、

なんてことはない。

家から通学する際に着てこなかつたのだ。

中学校から推奨されている雨合羽はあまりにも通気性が悪い。

おまけに少年はその体格に似合つて汗つかきだ。

だから、雨合羽を着て雨を凌いで学校に登校しても……
中身も汗のせいで半分ずぶ濡れでしたと、いうのも珍しくないのだった。

おまけに、

梅雨時期であることから雨合羽もほぼ毎日着ていかなければならな
いことになる。

少年にとつては毎日ずぶ濡れになつていかなければならぬこの
季節は憂鬱だった。

そんな時に、

朝の登校時に雨が降らなかつたから、・・・、

少年は解放された気分で、合羽を着ずに学校に登校して

で、帰宅しようと今に至るわけである。

『へつそー、、、、

あの時まで降りなかつた
だらうじて。』

少年はそつ懶を書つて校口から空を苦々しく睨んでいた。

『でも困つたなあ、
この激しい雨の中、じやあ
大抵一つしかない。

』

いつこの場合は、

一つ、

ずぶ濡れ覚悟で電軌車で突つ切つて帰る方法だが

この雨量ではまず確実に数分でずぶ濡れとなつてしまひだらう。
それでは結局カツパを着て帰ると変わらない。

わからぬ風邪を引いてしまつところオマケ付きた。

まつは

家に電話して迎えに来てもらひ方法だったが、

少年の時代では携帯なんてものはなく、職員室で借りなければならなかつた。

それだけならいいのだが、迎えに来てもうつといふ事は当然自転車を置いて帰らねばならず、明日の朝も学校まで送つてもらわなければならぬ。

以前にも

少年はそうしてもらつた事があつたのだが、

ことに田舎の学校はそんな些細な事でも噂になる。

あの時は色々と言われたので、それならずぶ濡れの方がはるかにマシだつた。

とはいつても、

風邪を引いて休めばその分、授業も出られないしノートも取れなくなる。

それはそれで

少年にとつてはある意味、重大な問題だつたのだ。

少年はあまり友人をつくるないし、人にはあまり頼らす自力で全て乗り越える性格だつた。

「人に頼る前にまず自分の力で乗り越える方法を探してみる。

そうすればそれが自分の成長に繋がる。」

それが彼を育てた父親の口癖だった。

そんな訳で、少年は今のこの状況をどう解決しようかと、考えながら雨が降りそそぐ外を眺めていた。

しばらく外の雨と周りを見渡しながら少年は考えていた。

考えた末に
少年は学校の中庭で
ギリギリまで待つこととした。

ギリギリとは、

少年の親が学校に電話していくまで、学校の先生に見つかるまでである。素直に先生に相談すれば最もいい解決策なのだが、

仮にそうしても

家に電話することになるだけだから、

それなら雨が止むかもしれないその時まで待つてみる事にしたのだ。

『はあ～、

しつかしホントによく

降るなあ～。』

少年は溜め息をつき、

外の様子をただ漠然と眺めていた。

『しつかしアイツは・・・

アイツがさつさと解放して

くれたなら雨に遭う前に

帰れたのになあ～』

少年は肩を落としつつも、その元凶となつた場所を疎ましげに見つめていた。

だからこそ、

異変に気づいたのかもしないのだが……

『ん?』

少年はふと

外のある部分に目を止めた。

何か光っているような感じに見えたのだ。

時間はもう夕方近く、雨雲のせいで外が薄暗くなっていたのだが、

そのおかげか地面のある所が薄く光っているように見えたのだ。

『こんな時間に、

あんなに雨が降つて

いるのに誰かいるのか?』

首を傾げながら少年はふと疑問に思つ。

時間的にはもう職員室にしか人はいない筈だ。

それにこんな大雨の中で人がいるなんて事態がおかしいはずである。

『どうせ暇だし、見に行ってみるかな。』

少年は中庭にあるベンチから立ち上がり、その場所に向かってみたのだった・・・

そこにはテニスコートの一角だった。

中庭とテニスコートは校舎一階の渡り廊下の下を通ればある意味地続きなのだ。

少年は校舎伝いにその場所の近くに寄つてみた。

傘を持つていな少年ではそつしなければたちまちずぶ濡れになつてしまつからだ。

“そこ”は確かに光つていた。

何か光が灑んでいるよつな……

淡い緑色の光がそこにあつた。

例えるなら、

とあるゲームのセーブポイントみたいな感じのよつな

そんな感じの光がまるで地面の“そこ”から湧き出でてゐるみたいだつた。

『なんだろう、これ？』

少年は手を伸ばしてみた。彼は雨に濡れていたのだが、その光をはつきり見てから

まるで蛾が蛍光灯の光に誘われるよつ

呆然とただ漠然に
手を伸ばしていたのだった。

少年がその光に

触れた瞬間　　！

ベキベキベキ

少年のいた地面は ！！

ぱっかりと無くなってしまったのだった。

少年が覚えていたのは、まるでヒレベーターで降りていったような

無重力のような感覚と、

引き込まれるような
下に落ちる感覚だった。

パラパラパラ・・・・・

あいたたた、

少年は頭を抱えながら上半身を起こした。どうやら尻餅をついただけですんだようだ。

• • • • • • • •

あ～あ、こんなに汚れたら母さんに殺される・・・』

少年はどうか怪我をしてないか確認するために全身を見渡して、

着ていたカッターシャツとズボンは泥だらけになっていたことに落胆していた。

彼の母親はある意味コワイ・・・

躾も教育も厳しい人だつたので服なんて汚したなんてわかつたらタダでは済まない事を思い出して、さらに落胆してしまつていた。

『それよつじにせんじなんだ?』

まだ痛む頭をさすりつつ少年は辺りを見渡した。

その際ふと頬に当たる雨にかられて上を見上げる。

上を見ると

ここから2、3メートル上に大きな穴が空いていて

そこからどんよりとした曇り空が見えていた。

穴から雨が降り注いでいたが時間が経ったからなのかその雨の勢いは少年が登校口にいた時よりは少なくなっていた。

少年は痛くなかった頭から手を離して下の地面に移す。

その時に彼は気づいたのだった。

一緒に落ちた地面の

部分と落ちた場所にあつたマットらしきもの、

少年は落差がありながらも傷一つなかつたのはそれらがクッションになつたからだ。

『これのおかげで助かった
のか・・・

それにしても・・・・『

少年はキヨロキヨロと辺りを見回した。

少年が落ちた周辺は暗くてよくわからなかつた。

落ちてきた穴から差す光はその周辺はわかるのだが、そこから奥の場所は光がないからわからなかつた。

『そういうば……一』

少年はポケットを弄つた。

中からライトを取り出し、スイッチを点ける。

自転車通学となると

たまに暗い夜道を通る事もある。

少年はたまに塾とかで帰りが遅くなる。今の自転車ならござ知らずこの時代の自転車のライトはダイナモで動いているから、当然、自転車が動かなければライトもつかない。暗闇の中で転倒しても大丈夫なようにライトは少年の父親が万が一に備えて持たせたものだつた。

明かりが灯つたライトを持つて少年は周りを照らしてみた。

照らされた明かりから古びた柱やボロボロになつた壁が見えた。

『…………？

家の近くにある古い

校舎と同じよつだけど。

そこは木造の廊下のようだつた。だがあまりにもボロボロで下手に足を運べばあつといつ間に足が嵌つてしまつのがわかるほどだつた。

『…………！

そういえば

聞いたことがある。

確かに、この中学校は地下にも施設があつたつて！』

少年は父親から聞いたある事を思い出していた。少年の父親はこの中学校のOGだったのだ。

以前の中学校は

そんなに広くなく、倉庫を確保するために地下に施設を造つていたのだといつ。

戦前から存在していた中学校だから防空壕がわりの洞窟をつまく使

つて施設を造つたところ」ことを彼の父親は何気なく話してくれていた。

ともかく、

少年はそんな話を思い出しながら辺りを照らしていた。

『ん・・・・・?』

少年はふと気づいた、廊下の突き当たりからあの光が漏れている事を。

光なら、暗闇にある廊下を照らしてその周りがわかるものだが、その光はまるで闇を照らさない光、……

言葉にすればそんな感じだった。

『…………』

ここに来るきっかけとなつたあの光を見た少年はライトを片手にその方向へと歩を進めていったのだった…………。

流石に長い間放置された施設だけの事はあるようだった。

廊下には木片、石、ゴミが散乱していた。ライトがなければ少年は何度も暗闇の中で躊躇うことだろう。

少年はライトを照らしながら足を進ませた。

『こんな閉鎖された所に
光なんて……』

少年は足元にある散乱した木切れに気をつけながら、ふとそんなそんな事を考えてつつ光を追い続けていた。

そして

彼は光の発生元になる場所にたどり着いていた。

そこは教室のようだつた。

古い木造の机、椅子……

もっともそれらは触れただけで簡単に折れたりしたが、

もう白くなり緑色の部分が細かくひび割れた黒板、

所々潰れている棚

おそらく生徒用の
ロッカー代わりなのだろうが

辺りはカビ臭い陰湿な匂いが充満していた。

だが、少年はそんな事を気にしてはいなかつた。

いや、氣にも留められなかつたという方が正しいのか・・・

そこには、

不可思議なものがあつたからだ。

“それ”は光つていた。

それはあの時の地面で放つっていた光の色だつた。

それは丸い光の玉だつた。直径は30cmくらいありそうな玉が彼の目の前で穏やかな光を放つていた。

『（オープ？）』

少年は直感的にそう思った。

少年がやっていたゲームの攻略本にあったアイテムのイメージ図と自然にだぶらせていたのだ。

『…………？

なんでこんなものが
こんな所に？』

少年はそう感づくとそのオープらしき玉に手を伸ばし始めた。

一度、危険な目に
あっているにも関わらずに、

少年は何かに引き込まれるように手を伸ばしたのだ。

光が少年の手に触れた瞬間

!!

オープから光が溢れ出して！

全ての闇を淡い緑色の光で吹き飛ばした…………

「この光がわかるのか？　

人間よ…………」

誰かがそういった気がした。

いや、少年にはそれはあのオープから発せられた声のような気がした。

「やうか、お前が…………」

いや、“言葉”といいつゝ想念といつべきなのかもしれない。

それはまるで穏やかな言葉…………

体験した人によってはまるで神の声のよろに聞こえるだらう。

「お前はこの力をどう使つ？
新たな“継ぎし者”よ
その行く末、
見定めさせてもらひうべ」

爆光の中で……

少年は意識を失う前にその言葉を聞いたのだった。

「おじいちゃん！」

「おやおや、お嬢ちゃんや。
今日もお話しを聞きたに
きたのかな？」

「うんー！」の前話してくれた
お兄ちゃんのお話しを
聞かせてくれる？」

「そうかそうか、ヽヽヽ
お嬢ちゃんも気になつた
のかあ～」

「！」のお兄ちゃんのお話つて
おじいちゃんが集めていた
本の物語なの？」

「そうじやよ。

今から遠い昔、ヽヽ
インターネットとやらが
それなりに発達した時代の
話でのう。

颯爽と登場したその者の
話は、当時は一種の都市伝説

として騒がれておつたの
じや。」

「ふうへん。」

「それを本に書き留めた者が
おつての・・・・・・・・
ちょっと赤茶けておるが
この本に書かれている
ものなんじや。」

「わ～い！～

おじこちやん

読んでよんで」

「これこれ

飛びつくな～い・・・・

今ではもう貴重な文献
なんじやから」

「ふんせんつてな～」

「本の事じやよ。

じゃあ読んであげるから
おとなしく聞いて
こむのじやよ

「うん」

「今から何世代の前の人達が
いた頃のお話じや・・・」

ガタンゴトン・・・

ガタンゴトン・・・

列車に揺られること

小一時間・・・

私は故郷に向かつていた。

私の名前は塙原恵美子、

今、向かつている大井町は私が生まれ育った所だ。

高校までをそこで暮らし、大学は地元を離れた所を選んだ。

そこで先生になるための免許を取つて、

今では地元から2つ先の町で教師をしている。

中学生の先生になつてからは忙しくなり

地元の同窓会も何回か出席できない事があつたのだけど・・・・

幼稚園の頃からの親友から連絡をもらつて、今回の同窓会の事を知つた。

その親友には

「出なかつたら何回も電話してやるんだから～～～（泣）」
と、ある意味脅迫めいた事を言い始めたので（汗）

仕方なく、同僚の先生にお願いして出席しに向かっている。

「・・・変わったわね

「この町も・・・」

私は列車から見える大井町の風景を見てそう思いを馳せた。

私が先生として頑張つている間に、

この大井町は大規模な水害に遭つてしまつた。

私の実家はまだ山奥にあるために無事だつたのだが、町を流れる水
良川周辺は氾濫した水流により多数の死者と家屋の損害があつたら
しい。

そのためか、川の両端には今まで見たことのない大きな堤防が出来
ていたのだ。

変わりゆく町を見ていた私は
ふと列車のブレー キ音に我にかかる。

気がついて前を見ると
列車はもうすぐ大きな駅にその身を休めようと停車しようとしていた。

その駅の停車場に一際、
手をぶんぶんと降っている
女性がいるのを
私は列車の窓越しから見つけた。

その顔に昔の面影を見る。
そう、同窓会に出席しなかつたら何某へと脅迫してきた
親友である。

「・・・ホント、
変わらないなあ・・・」

私は顔に笑みを浮かべて苦笑していた。

『まもなく大井駅
大井駅です
御降りの際には
お忘れ物のないよう
に
御注意下さい。』

聞き慣れていて、
それでいて懐かしいアナウンスを耳に刻みながら
私は手荷物を持って降車口に向かつて歩き出した。

「久しぶりー！」「ーー！」

会いたかったよー！ーー！」

列車から降りた私を襲つように一回り小さな女性が抱きついてきた。

「もうー、あんな脅迫めいた
事いわれたら
来るしかないでしょ紗弥。」

私は抱きつかれた彼女を右手であやしつつ
優しく話しかけた。

「えーーー！

脅迫なんかしてないよー
HIMIが参加してくれないからあーーー（泣）」

「はーいはーい、ー、
とりあえずHIMIに
なんだから
早く駅の待合室に行きましょ。」

私はそう言つと
紗弥加の手を取つて
手を繋いで駅の出口へと向かつていった。

この子は古山紗弥加、

私の幼稚園時代からの親友だ。

家は離れていて

幼稚園や学校でしか会えなかつたが、

幼稚園では彼女と私しか女の子が居なかつたのですぐに仲良くなれたのだ。

私には弟がいて、彼女は一人っ子だった。

そのせいなのか、

いつの間にか私が姉、彼女が妹というポジションになつてしまつたのだ。

また、彼女の体格は普通の女性よりは一回り小さな為、
2人でいると姉妹と間違われたりすることもあつた。

高校までは一緒だつたけど、たしか彼女は看護学校に進学したから
別々になつてしまつたかな・・・・・

と、私は腕に抱きついてくる彼女の感触に懐かしさを感じながら考
えていた。

「サヤ、そんなに
寂しかつたの？」

「だつてHIMI、中学の同窓会
来てくれなかつたもん」

そう言つて紗弥加は頬を膨らませて私を見上げる。

「ごめんね、私もまだ
先生になつたばかりだから
時間なくて、 、 、 」

「でも、 今日来てくれたから
許してあげる 」

笑顔で目を閉じ、私の体に顔を埋める紗弥加に
私は苦笑していた。

「ホント私には
甘えん坊なんだから。 」

先生になつてからは自分の受け持つ生徒の為に色々と頑張ってきた。

熟練した先輩の先生達ならいざ知らず、
なりたての私に出来ることは時間をかけてでも生徒の為に頑張ること
とだった。

でも、私の友人には本当に寂しい思いをさせてしまったようだ。

特にこの子は気を許した相手には甘えん坊になつてしまつ。

そういえば“彼”も大変だつたかな・・・

また私は苦笑してしまつた。

「どうしたの？　HIII、」

私の顔を覗き込む紗弥加。

「ううん、なんでもないわ。
それより紗弥はどうなの？
たしか大井病院に就職した
つて聞いたけど、」

「うん 小児科病棟の
看護士さん。

毎日が楽しいんだ～」

「精神年齢が近いから
じゃないの？」

「あ～！

HIII～ヒドいよ～…」

私の腕をますます抱きしめて彼女は抗議の眼差しと脹れつ面を見せていた。

「ふふつ、『めん』メン
(ホント胸は羨ましくらいに
あるわね・・・)」

腕から伝わる柔らかさを受けて私は内心呆れるような思いを抱いて

いた。

この子は何故か私より大きい。

私も人並みくらいにはあるけど、この子には敵わない。

「あ～っ！！」

「また胸の事考えた～！！」

「そんなことしてないわよ」

私はクールに表情を浮かべて隠し通そつとしていた。

「・・・・・・・・

「そういえば、紗弥加

有井君が亡くなつたのは
ホントなの？」

紗弥加の追求をかわしきつた

私は、ふと頭によぎつた気になる事を聞いていた。

「…………。

うん…………。

本当だ……よ。

私も信じられなかつた

一転、明るい顔から少し伏し目がちになり目線を落とした紗弥加だつたが、まだ私の腕を抱いたままだつた。

「そう…………。

私も静かに声を落として俯きがちになつてしまつた。

有井勇治

私達とは中学校からの同級生で高校もクラスは違えど一緒だつた。

不良で悪ぶつていたが、野球だけは一途に続けていた彼は中学高校とレギュラーで輝いていた。

高校卒業後はたしか車の整備士になつたと人伝に聞いたことがある。

私はあまり知り合いでないのだけど、高校卒業してから一年した

頃、帰郷した時に衝撃的な出来事を知ったのだった。

彼が死んだ、と

ある日の夜に車でドライブ中に水良川に飛び込んでしまったそうだ。

私はその話しへ親からの電話で聞いたときびっくりした。

みんな、卒業してから何年かして出合ったとき生きていて再会を祝えると漠然と考えていたからだ。

彼のよつこまだ20歳になつたばかりでこの世を去つてしまつた事に・・・・

私は驚愕を隠せなかつたのだ。

不意に私の腕を包む温かさがなくなっていた。

私が振り返ると、

紗弥加が顔を落として地面に視線を落としていた。

前髪で私からは彼女の目が見えなかつたが、

何故だか彼女は泣いているように見えた。

「……

亡くなつたの有井君だけ
じゃないんだ……」

「えつ……」

「実はね……」

いつもは聞かない紗弥加の沈んだ声を私は聞こうとした……。

「古川ちゃん！」

私は背後から聞こえる声に振り返る。

私の視線の先には髪の毛を今でいうロン毛のよう伸ばしていた男の人がスーツ姿で手を振っていた。

髪型は変わっていたが、私は顔を見て懐かしい思い出の中の彼と重ねる。

「もしかして佐古川君？
ホント変わったわね。」

私は笑みを浮かべてまた後ろを振り返って紗弥加の手を優しく掴んでいた。

「えつ・・・・・！
え、HII-?」

「紗弥にそんな顔は
似合わないぞ

今日は同窓会なんだから
楽しもうよ

そう言って彼女の手を引っ張って佐古川君の下に向かう私に・・・

「・・・・・

うんっ

一瞬ではあつと明るく表情を変えた紗弥加が手を引かれながら歩いていった。

parte.5 あの人

「皆さん、今日は集まつて
くれてありがとう！
みんなと再会できて
俺も嬉しいです・・・」

そんなスピーチから始まつた同窓会はみんな楽しそうに談笑してい
た。

私も会場に入つてからクラスメートや親友達に挨拶や近況などをお
互いに話し合つていた。

みんな色々と夢をもつて働いているみたいで
私自身、頑張らなきゃと勇気を貰えたようで嬉しかつた。

ただ、私は氣になつていた・・・

あの時に紗弥加は何を言おつとしたのだろう。

私は教師の仕事が忙しかつた為、あまりにこの近年の地元の情報には
詳しく述べなかつた。

有井君の話は親からの電話の中できつたからわかつたのだけど・・・

話し疲れたので私は会場の端で外の景色を見ていた。

時間はやっと昼の三時くらいだろうか、太陽がさよひビリビリから中空に見えるくらいだった。

懐かしく思う風景の中で

私は一人座っている彼女を見つけた。

彼女は会場の外にある中庭にあるベンチに座っていた。

普段の彼女からは想像できない姿に
私は歩を進めて彼女の傍らに座った。

「どうしたの、

同窓会、楽しみじゃ

なかつた？」

そつと彼女の頭を優しく撫でる。

「・・・・・

「ミ・・・・お姉ちゃん」

暗く俯きがちの顔をあげて私を見た。
少し目が腫れているみたいだ。

同じ年なのに、
彼女は悲しい事があると
このように私を呼ぶ。

「紗弥加、何があつたの？」

さらに頭を撫で続けていた私は、その手を紗弥加の背中に移していった。

「・・・・・・

エミ・・お姉ちゃんは
あの人のこと、覚えてる？」

あの人？

私はその言葉が引っかかった。

「ホントに優しかつたな・・・
私、エミお姉ちゃんと
同じくらいに
あの人人が好きだった。」

そう話す紗弥加の顔は少し笑顔が出てきたよくな・・・・・気がした。

「・・・・・・・・・・
ああ、・・・彼かあ・・・

やつと私の頭の中にも紗弥加のあの人気が誰なのかがわかつたのだ。

「紗弥加がよく抱きつくから
力レ、いつも固まつて

あの人は紗弥加が
苦手だつたかな？」

少しからかい氣味に紗弥加をいじつてみた。

「えへへ！」

「そんなこと無いよ～（泣）」

暗い顔から明るい顔にぱつと変わる紗弥加、

ホント

我が妹分なら可愛いわね。

少し視線を落としてたわわに実るソレを見る。

「・・・・」れじや

あの人も

大変だつたかも、ね

「？」

私の視線の意図が理解できなかつたのか

紗弥加は不思議そうな顔をして首を傾げていた。

「さて、そろそろ
戻りましょう」

私は立ち上がりて紗弥加に手を差し伸べる。

「今日、あの人も来てるかも
しれないし

思いつ切り甘えてきたら？」

だけど、その言葉を聞いた紗弥加は私の手を取りついでして
一瞬、動きを止めてしまったのだった。

「…………
や、やや」

私はそこから言葉を続けることが出来なかつた。

「わあああああ…………！」

会場から男の人の悲鳴が聞こえてきたからだった。

parte.5 あの人(後書き)

やつと、やつとだ・・・・・

もうすぐ復讐を果たせゐ・・・・・

父さん、母さん・・・・・

俺達を助けなかつたあいつらを・・・・・

妹を弄んで

追いやつた先輩を・・・・・

あいつ・・・・・

しばらく地元にも帰つて来なかつたからなあ・・・・・

クククッ・・・・・
しかし、安心したのか

同窓会の幹事だつて？

もつ自分は関係ないとthoughtのかよ、 、 、

準備は整つた・・・

まずはアイツの大切な物
全てをメチャクチャにしてやるーー！

あいつに無力感を散々味合わせて、 、 、

最後に！！

俺がアイツを・・・
あいつらを殺すんだ――――――

「一九四〇年九月二日

引つ張らないで！！」

「紗弥つ
！」

「いつたいあなた達何をする気なのー?」

私は謎の男達に連れ去られようとする紗弥加を助けようと彼女に向かって駆け出していく――――――

でも、突然脇腹に重い衝撃を受けて私はあの子の下にたどり着くことが出来なかつた。

「お、ううう……」

突然の痛みと衝撃で私は床に崩れ落ちていった。

痛みをじりて姿勢を崩したまま顔を上げる・・・・・

見ると謎の男達のひとりが拳棒で私のお腹を殴りつけてきたのだ。

「塩原さん！！

お、お前うああああああ…！」

近くで見ていた佐古川君が私を殴りつけた男に殴りかかってきた！

でも！！

バキィイ！！

「があつっーー！」

まるでドリマで使う効果音が響き渡り佐古川君も倒れてしまった。

だが佐古川君を殴りつけたのは私を殴った男じゃない・・・

「センパイ

お久しぶりですね～。」

佐古川君を殴りつけた男は周りの男達に命令して彼を数人掛かりで拘束し、彼の顔を自分に向けさせた。

男達のボス（でいいのだろう）は被っていた覆面を取り外した。

「お、お前・・・・！」

佐古川君はボスの素顔を見て驚愕の眼差しを見せていた。

「やつすよ～。

可愛い後輩の顔を忘れる
なんてことないっすよね～

センパイ ～

「ぐ、倉橋・・・・・！」

そこには・・・・

佐古川君の知つている後輩がいた。
禍々しい笑みを浮かべながら・・・・

あの時、

私と紗弥加は会場から聞こえる叫び声を聞いて、
すぐに会場に駆け込んでいった。

だけど、それは浅はかな考えだった。

中には拳銃やライフルなど映画やドラマでしか見たことない武器を
持つていた覆面の男達が同窓会会場にいた人全員に武器を突きつけ
ていたのだ。

近くにいた男に気付かれてしまつて

私と紗弥加も拳銃を突きつけられて会場の隅に追いやられてしまつ
た。

だが、男達の中の独りが紗弥加の腕をいきなり引っ張つてどこかに連れ去るつとしたのだった

「ぐ、倉橋・・・・・！」

お、お前

何を考えて・・・・・！」

男達に拘束されながらも

佐古川君は必死に体を動かしながら抵抗していた。

「復讐つすよ」

「なに！？」

男達のボスである倉橋は佐古川君を見下ろしながら憮然と言つた。

ただ、私は彼の眼を見て少し震えを覚えていた。

口調は軽こよひにみえるナビ、すいじい冷たい眼をしていみる

私は無意識にも彼らから遠ざかってしまった。

まだ痛む脇腹を抱えながら、

「俺や妹が味わった痛みや
苦しみをアンタらに
味合わせてやりたくて
やりたくて・・・・

そういうて壊れたような笑みを浮かべた倉橋の手には何かが握られていた。

折り畳み式の金属の警棒、さつき襲いかかる佐古川君を殴ったのもソレだらう。

「やつと願いがかなつた
んだよおおお！――」

警棒を振り上げた倉橋は佐古川君の頭を言葉と共に殴りつけた！

ガツツツ――

「ぐつうう――・・・・

「佐古川君！――」「あつちゃん！――」「篤つ！――」

周りから同級生達が心配そうに呼びかける。

まづは妹の分を受けて
むりうつすよ。

お
い
！
！

・ たつ ぶり

樂しんでこしよ

ג'ת'ה'ג

倉橋の命令を聞いた男は紗弥加の腕を引っ張つて何処かへ連れ去る
つとしました。

「いやあつ！」

お姉ちゃん！

助けてえ――――――――――

「お前がやつたんだよ。」「お前がやつたんだよ。」

同級生達の何人かが紗弥加の下に駆けつけようとした！！

バラララララララッ！！！

「さやあ！！」「ぐわあ！！」

空気を切り裂くように聞こえる発砲音に彼等も身を竦ませてしまつ。

彼等と紗弥加の間にいた男の1人が銃を撃つて牽制したようだ。

「ぐ、倉橋・・・！」

麻里ちゃんの事は
俺が悪いと思つ。

罰なら俺が受けるから！！
だからこやま「バンッ！！」
・・がああああつ！！！」

話している途中で佐古川君は脚を押されて苦しみだす。

まだ痛い脇腹を無理に押さえつけて私は倉橋の方を見た。

彼は佐古川君に向かつて拳銃を突きつけていた。銃の先からはうつすらと煙が見えていた。

「バ～カ それじゃ妹の分の
復讐にはならないつしょ。」

銃を下ろしてにこやかに微笑みながらしゃがみ込み佐古川君を覗き
込む倉橋、

「知ってるんですよ。

センパイが紗弥加ちゃんのこと好きだったことぐらい」

「！…！」

脚の激痛に耐えながら佐古川君の眼が見開くのが私にはわかつた。

「それに」

お前も、お前も、お前らも…！

俺の復讐の為に全員死んでもらうつす

そう言った倉橋は会場に置いてあつたテーブルにかけてあるクロスを荒々しくめくつた。

その下には…・・・

素人の私にもわかるような…・・・

何百もあるダイナマイトに繋がれた爆弾があった。

「く、く、うは・・・し・・・」

「センパイ

既に警察も気付いて
包囲してゐみたいだけど、

1人でも踏み込んできたら
コレ、爆破するつすよ」

出血と激痛で朦朧とする意識を必死で保とうとする佐古川君を無邪
氣で、それでいて残酷な笑顔で口を歪ませながら・・・

倉橋は彼を見下していた。

「（紗弥加・・・・）」

連れ去られた親友を救い出せない無力さに
私は悔しくて目を閉じるしかなかつた。

ガラガラ／＼

「いらっしゃい
あら、お兄さん
また来てくれたの

「ええ、日曜日は外食する
ことにしているんだ」

「この注文は………
このもの?」

「はい、カツカレーで
お願いします。」

「はいよつ！あんたゞ
カツカレー1つゞ

それにしても

・・・

「いえ・・・・僕
カレー好きなんです。」

「毎日でも飽きないくらい（笑）」

「ホントにカレー好きなのね～」

「あの～～テレビのチャンネル
変えていいですか？」

「今日はお兄ちゃんだけ
だからねえ～

ハイ、これリモコン」

「ありがとうございます」

ピッ

『緊急ニュースをお知らせします。

本日15時48分、大井町市民会館にて人質籠城事件が発生しました。

犯人グループの声明はまだ表明しておらず、中にいる人質である大井高等学校第96回同窓会に参加していた約70名の安否も不明なままです

また、未確認ですが“サヤカ”と呼ばれる女性が連れ去られたとの情報があり、警察では一層に警戒を強めています。』

「…………

「あ、お兄ちゃん
今日はいつも来てくれる
から何か一品つけようか

「おばあちゃん、

ガタッ・・・・

「どうしたんだい。
急に立ち上がりつて。」

「「めんなさい、カツカレー
キャンセルしていいですか？」

「えつー・・・どうして・・・・

「・・・・・・やる事が
できたんですね。

遠い過去に忘れてきた
ものを取りにいかないと
いけなくなりました。」

「・・・・・

大切なモノなのかい?」

「・・・・・・・・

はい、

あの、カツカレーのお代は
置いておきますから

スッ・・・

「お釣りはいらないです」

「えつ、ちよ、ちょっとーー?」

「それじゃあ、また。」

ガラツーーー

ピシャンーーー

「ちょっとお兄さん、

待つてーーー」

「も、もう居ないなんて・・

あんなお兄さん
初めてだよ、 、 、 」

ガツツツッ！！

「 もやあつーー！」

一方その頃、男に連れ去られた紗弥加はある個室に引きずり込まれていた。

そこは簡易用のベッドがある所を見ると仮眠室のようだった。

「 ちょっと狭めえが、
ま、楽しめれば場所は
どこでもいいかあ」

男は紗弥加を殴りつけて大人しくさせると、両手で彼女を抱えてベッドに放り投げた。

そしてドアにカギをかける。

ガチャリ・・・

ベッドに放り投げられたショックですぐさま動くことが出来なかつた紗弥加にとつては、それは何とも心を抉るような小さく、それでいてはつきりと聽こえる金属音だった。

「 な・・・・・・

何を・・・するの・・・?」

これからされることを本能で感じ取っているのだろうか、紗弥加は体中がガチガチと震えだしていた。

歯はカチカチと震え

顔は真っ青に蒼ざめていた。

でも、目の前に迫つてくる大柄な男から目を反らすことができない。

必死の抵抗なのか

着ているブラウスを両手で覆うしか彼女には残されていなかつた。

「なにつて・・・・」

男は着ている服を脱いで、ベルトを力チャカチャと鳴らして緩めていく。

「あ、あ、あ・・・・・」

「こんな部屋で男と女が
するつていつたら

・・・・・」

最後に男はベルトを引き抜くと・・・

紗弥加に向かつて舌なめずりをして、
言つた・・・・・

「一つしかねえだろ？」「……！」

「イヤイヤヤヤヤアアア！」

紗弥加は覆い被さる男をはねのけようとするが
男と女の力と体格の差では到底適わなかつた。

男は素早く紗弥加の両手をベルトで縛つて拘束し、
無理やり両手を彼女のブラウスのボタンに入れて引き裂いた！

ブチブチッ！

ビリィィィイー！……！

ボタンがたちまち吹き飛ばされる。

「嫌あ……！」

「やめて……見ないでえ……！」

「やつぱりデケエなあい！」男は紗弥加に跨つていた。いわゆるマ
ウントポジションと呼ばれる位置で、

男の目の前は

もつ少しではじけそうな下着に隠された胸が見えた。

「…………」

紗弥加は恥ずかしくなり目には涙を溜めて顔を反らす。

だがそんな行為をえ、男の嗜虐心を誘つだけだつた。

「ああ～て、まずは味見
しないとなあ～」

男の邪な手が

紗弥加の豊満な胸に迫りつとしていた

…………

そんな時だつた。

『もしもし亀よ～
亀さんよお～』

突然、部屋の中で場違いな呑氣との歌が響き渡つたのだ。

「だつ！？」

「誰だつづー？！？？」

あと少しで彼女の胸を蹂躪しようとした男はバツッと跳ね起きて辺りを見回した。

だが、男がどんなに振り向いても

どんなに見回しても目の前の女以外には誰もいない。

『世界のうちで、

お前ほど

』

また歌が聞こえる。

「なつ！？」

「どこだつー？」

「ドコにいるつづー……！」

また男は周りをキョロキョロしだす。

紗弥加は男に襲われたショックからか気がついていなかつた。

ただ、これから男によって行われる行為に身を堅くして耐えようとしていた。

『こんなに

馬鹿な奴はいねえ・・・』

次に聞こえた歌は

最後は暗く、怒りで濁つた声で聞こえてきた。

男はすぐさま部屋の窓と閉じたドアを直視したが、・・・、

全てカギがかかっていた。

「・・・・・！」

男が驚くより先に・・・、

最後の歌のパートが聞こえてきた。

『どうして、、

こんなにバカ

なのがねえ！・・・』

男がやつと舌の方向に気がついた時には、 、 、 、

男は部屋の壁に打ちつけられていた。

「「」まおつつ！ ！」

右の脇腹を貫く重い衝撃と
口と喉に溢れかえる胃液の
焼ける感じ、

さらりと全身を襲う激痛。

男は一瞬にこれらの痛みを味合わされたと知った時には、
部屋の床に顔から突っ込んだと知覚したあとだつたのだった。

紗弥加は部屋内に響く轟音にびっくりして身を竦ませた。

そのお陰で彼女は正気を取り戻す事ができたのだが、

動かせる首を傾けて
彼女は驚いていた。

1人の男が立ち上がっていた。

その体躯は大柄で

真っ黒なポロシャツとズボンを纏い、

顔には不敵な笑みを浮かべて倒れ込んだ男を見ていた。

彼は男の所にベッドを迂回して回り込むと、

男の服の首根っこを掴み・・・・・

片手で部屋のドア側の壁に投げつけた！

ドガアアアアアン！――！

「ぐえええつつ！？」

壁から床に叩き込まれる男の口からは赤にせり黄色にせりの液体が
とめどなく溢れていく。

もはや、先ほどの一撃で男の戦闘能力、
いや生命活動に致命的な衝撃を与えたのは明らかだった。

だが、彼は男に近付くと右手を振り上げて“力”を集中するよつて
拳を握りしめてきた。

「女の子を襲うなんて・・・

あの世で詫びていい！――！」

そう言つてしまふ

彼は“力”をこもった右腕の鉄槌を男の頭に叩き込んだ！！

バキヤヤヤヤヤアアア――！――！――！

「が・・・・・・・・・・・・・あ

何かを碎くような嫌な音を響かせて、

男は白目を剥いて倒れ込んだ。

何度か全身を痙攣させながら・・・。

騒ぎが起きている市民会館から少し離れた公園に、ひとりの人影があつた。

もうすぐ夕暮れ時になりつつあるオレンジ色の世界の中で、青年は女性を抱き上げたまま歩き続けていた。

青年は公園の中央にある噴水近くにある芝生まで歩を進めると、静かに腕の中にある彼女を降ろしていった。

まるで恋人を扱うように優しく纖細に、
彼女を見つめるその顔は

無理に笑顔を浮かべていた。

やり切れない気持ちで曇らせた顔を隠そうとして

『ひどい、 、 、
こんなに頬が

腫れるまで殴るなんて 、 、 』

そつと手を彼女の顔に触れる 、 、 、

「んつ 、 、 、 、 、

い、いや・・・

寝言なのか、

彼女は気を失つたまま口からそう漏らした。

触れられた頬の痛みからなのか、彼女はまだ心に襲われた感覚が蘇つてしまつたのだろう。

青年は一瞬、手を引っ込めてしまつた。

『もう・・・・・

大丈夫だからね

さやかちゃん・・・』

そう言つと青年な右手に“力”を集中させた。

あの時に男を殴りつけた破壊の“力”ではなく、癒やしの光を手に宿して再び彼女の頬に触れた

あ・・・・・れ・・・?

わ、私

どうしちゃつたんだうつへ

たしか、 、 、
男の人に襲われて 、 、
む、 胸を見られて 、 、
でも、 今は 、 、
そんな怖い感じじゃない 、 、
なんだか温かい 、 、
この温かさ 、 、 、
覚えてる 、 、 、
私、覚えてる 、 、 、
これって 、 、 、
あ 、 、 、 、 ?
頬に冷たい 、 、 、
いや、温かな感じ、
これ、誰かの手みたい。

少し目を開けてみた。

まだ視界がぼやけたままだ。

焦点が合わない・・・

でも、わかる・・・

誰かが・・・側にいる・・・

だ・・・れ・・

え・・・・・

なに・・・・・

頬に触れた手が温かくなつて

何だか暖かい・・・

まるで体が癒されていく感じ・・・

この温かさ・・・

もっと欲しい・・・。

『えつ・・・・!?

それは青年にも予期しなかつた事だった。

彼女は頬に触れた青年の手を無意識に手に取っていた。

そして優しく握っていく。

彼女が腕を上げた為、破かれたブラウスがはだけて……
隠されたものが見えてしまった。

『／＼／＼／＼／＼！…！』

青年はこの手のものに弱かつた。

田を反らしたかつたが治療に集中しているため動くことが出来なかつた。

不意に喉が唾を飲み込んでしまひ。

『（ハハハハ…）』

青年にとつては永遠にも思える時間だった。

治療が終わった青年は立ち上がり彼女を見下ろした。

その際に少し身震いする。

今の青年の上半身を纏う服はさつきより薄くなっていた。

だが、すぐに青年の体には熱気がまとわりついてきた。

それは“怒り”
いや使命感とも思える感情が“力”と共に溢れかえつていった。

『お前がこんな無関係な人達
を巻き込むなら・・・！』

ブンッ！

憤怒の感情を乗せて右腕を振るつた。

『ウンッ！－！－！

すぐさまそれは強い衝撃波となつて公園の木々を凧いでいった。

『俺は・・・・・・

お前を止めてやる！－！－』

青年は“力”を込めた拳を握りしめて
静かに唸つていた。

「えつー!?」

紗弥加が気がついた時にはもう誰も居なかつた。

近くを見渡すと

見覚えのある噴水が目に飛び込んできた。

そこは紗弥加にも覚えのある公園だつた。

同窓会の会場となる市民会館から近くの公園だつた。

紗弥加が身を起こすと黒い服が自分にかけられている事に気付いた。

それは黒いボロシャツだつた。紗弥加はすぐに手に取つて広げてみた。

『これ・・・・

あの時、

助けてくれた人の・・?』

その時、ポロシャツの胸ポケットに紙切れが入つているのに気がついた。

気がついたかな？

この公園を出たらパートカーが止まっているはずだから保護してもらつて。

頬のケガはちゃんと治しておいたよ。

あとは僕に任せて

信じて待つてほしい。

君の大切な恵美ちゃんを助けてくるよ。

追伸：ホントは服も着せておきたかったけど・・・・

恥ずかしいから無理だつた(へへへ)

だから僕の服をかけておくね。

「…………

「一体、誰だつたんだろ？」「

紗弥加はポロシャツを抱き寄せながら…………

ずっと考えていた。

そして、服についていた匂いに顔をうずめた。

「あ・・・・・
なんだか懐かしい
匂い・・・・・

もしかして

“あの人”の・・・?」

その姿を巡回中の警察官が見つけたのは、それから間もなくの事だ
った。

バキッ！

ドカッ！！

バキッ！！

私は耳を疑いたくなつた。

本当は楽しい談笑の声しかしないはずの同窓会の会場は・・・

今や悲惨な打撃音が鳴り響いていた。

「へつ・・・・・
やつと大人しく
なつたつすね。」

そう吐き捨てる

倉橋は男達に命令して拘束を解いた。

拘束を解かれた男は膝から崩れるように倒れ込む。

男 佐古川君
は頭、胸、手足にかなりの打撲跡を浮き上がらせていた。

あまりにも警棒で殴られ続けたため、あの立派なスーツはみるも無
残な有り様になってしまっていた。

正直、私も目を反らしたい気持ちになつてしまつ程に。

藍色のスーツに赤黒い跡が浮き上がっているのを見れば、誰もがその凄惨さを想像できるだろ？

卷之二

その様子を見た私は唇を噛み締めて立ち上がった。

「あ、あなた・・・！
さ、佐古川君になんて

۱۷۰ ایجاد

殴られた脇腹はまだ少し痛むが、持ち前の精神力で押さえ込み叫ぶ。

「だからいつたつすよ？」
復讐だつて

倉橋は悪ひれた様子もなく言葉を軽く放つ。
そして、倒れ入んだ左吉川の腹を蹴り飛ばした。

もはや呻きやえも吐き出せない彼は蹴り飛ばされるまま仰向けに転がっていた。

• • • • • • •

その時だつた。

私はとっさに倉橋と佐古川の間に割り込み

両手を広げて倉橋を止めるみつて立ち塞がった。

「 ハハハ… 」 「 塩原さん… 」 「 恵美子… 」

周りからみんなが心配になり声を叫ぶ。

だが、彼らは倉橋の部下である男達に阻まれて私や佐古川君の所に来られない。

「 もうやめなさい… !

もう十分でしょ… !

私は倉橋の田を睨み付けて声を張り上げた。

「 あなたと佐古川君の間に何があったのか

私は知らないわ… !

でも… … …

私はさうじて倉橋に言葉をぶつけていく…

「 だからといって…

紗弥加やここにいるみんなに

酷い事をする理由には

ならないのよ… !

一通り喋り終えた私は少し息を切らせながらも

倉橋の前から動かず

むじり震える脚を抑えて立ち直す。

本当は怖い！

まだ、私は学校で不良とかを相手に立ちふさがった事なんて・・・
・
ない

でも
！

それでも、ここで引いてしまつたら・・・

私、先生としても
人としてもいられない！

私は勇気を奮い立たせて再び倉橋を見据えた。

「
・
・
・
・
・
理由ならあるつすよ」

だが倉橋は私の威圧えた視線をもろともしないで見つめ返した。

その目は先ほどまでに佐古川君を狂氣の笑みを浮かべて痛めつけた人物とはいえない程に、

静かに、暗く、無表情な表情をしていたのだった。

「塩原センパイは
あの時、ここに
いなかつたから
わからないっすよね」

まるで静寂を身に着けたような雰囲気を纏う倉橋はそのまま喋り続けた。

「あの水害で、俺は
父さんと母さんを
失つて……

それからこいつらの親が
何をしたのか……」

徐々に語氣に怒りの感情を乗せつつあるのが私にもわかった。

「そうっすよね！
今川センパイ！！」

そう唸る倉橋の声に弾かれるように私は周囲にいる同級生の中にはいた男の人を見ていた。

「ええ、そうっすよ！
「・・・・・！
お、お前・・・！
あの時の事を・・・？」

俺はあんたらの親のせいでの

丸裸同然に町を

追われたんだよ！」

言葉を叩きつけるように話す姿に、

私は倉橋の憎しみがついに爆発したような気がした。

「だつたら！

みんなには直接関係

ないじゃない！」

「わかつてないっすね～

センパイ

私の張り上げた声を倉橋はやれやれといったポーズをとつて愚痴るように喋る。

「俺は大事な家族や居場所を
あいつらやそこにいる
センパイに奪われたんすよ？」

「え・・・・？」

「だつたら同じ苦しみを
味合わせてやりたいじゃ
ないっすか。」

そう言い切った倉橋はもつ、割り切った憎悪を顔に張り付けていた。

「！」を吹き飛ばして

お前らを皆殺しにすれば
あいつらと同じ苦しみを
与えてやれるしじょ？」

「あ、あなた・・・！」

私は彼の狂気に触れて気分が悪くなりそうだった。

「でも、コイツだけは
爆弾じゃなく俺の手で
殺さなきゃ

そう楽しく言葉を連ねる倉橋はポケットからナイフを取り出した。

[25]

私は彼の手に握られた鈍い光に目を見開く。

間違しない。

彼は私の後ろにいる佐古川君を刺す気だ！！

塩原センハイ

気がついた時には私と倉橋の距離はもう一歩くらいしかなかつた。

「！」

「センパイ、俺はそいつを

殺すつす。

妹の敵討ちですから」

「あなたは ！」

不敵にナイフをちらつかせる倉橋に私は怯まずに立ち向かった。

「あなたはただのハツ当たり
をしてるだけじゃない！」

事情は詳しく知らないけど
私は絶対にどかないから！」

紗弥加だって今頃必死に抵抗して頑張ってる！－

私は絶対に引かない！！

先生としての使命感、
紗弥加を助けにいきたい想い

それらが全ての力となつて私を恐怖から奮い立たせていた。

「・・・・・・・・・・・・・・

そうっすか・・・・

一瞬、倉橋はまた静寂を纏つた無表情になつていつたけど・・・・・

すぐに怒りの表情になつて私を睨んでいた。

「邪魔するなら

関係ないセンパイでも

殺すっすよーーー！」

そう叫ぶ倉橋は銀色の軌跡を描いて、

ナイフを私に掛けて振り下ろした！！

「やめてえええーーー！」

「塩原さんーーー！」

「いやあああああーーー！」

ああ・・・・・

私、殺されるんだ・・・

紗弥加も助けられないまま・・・

振り上げられたナイフがなんだか遅く見える・・・

私は静かに目を閉じた。

瞼に映るのは
紗弥加やお父さん、お母さん、

大学の同期の友達や

妙ちやんやマキちやん達クラスメートとの楽しさ日々・・・・・

あ、、、

これが走馬灯つてものなのかな・・・・・

ごめんね紗弥・・・・・

助けてあげられなくて・・・・

ねえ、もし聞こえていたら

元気来て！

みんなを助けてよー！

紘平君—！

parte · 10 その男、颯爽と！！

ヒュン！――！

ギイイイン――！

「えつ――？」

「・・・・・え！」

「なにつ――？」

私はいつ襲つかわからぬ激痛に体を竦ませていた。

……でも、その痛みは何時まで経つても私の身体に響く事はなかつた。

「…………？」

私は恐る恐る目を見開いた。

「え…………？」

私の目の前には、

信じられない光景が広がっていた。

誰かが立っていた。

私は背中を向けながら、

左手に握られた何かである男のナイフを受け止めていた。

それはあの男達が使っていた金属製の警棒、

私は目の前に立ち塞がる人を見つめていた。

それは黒い壁のよつに大きな身体で、

黒い半袖と黒いズボンを身に纏つて・・・

私をまるで守護する戦士のよつに、

目の前の敵と対峙していた。

振り下ろされそつなナイフを警棒で押し戻しながら

やがて彼は左腕に力を込めて右手を警棒に添えて両手持ち

右手を警棒に添えて両手持ちに変えて、

殴り合いをするナイフ」とあの男めがけて振り下ろした！――

バキン！！！

金属をへし折る音と共に

あの男も会場の壁めがけて吹き飛んでいく！！

「ぐはっ！？」

あの男 倉橋は

背中から壁に吊きつけられて

呻き声を出して床に吸い寄せられるように倒れていた。

カラーン・・・

その後についていくように何かの金属片が床に落ち、音を立てて転がっていく。

それは先ほどまで倉橋の手に握られていたナイフの刃先だった。

彼の一撃はあの固いナイフの金属をも叩き割っていたのだ。

ブンッッ！！

まるで刀につく血を振るつて落とすように
彼は左手の警棒を腕ごと振るつていた。

誰もが言葉を失っていた。

田の前の出来事が信じられなかつたからだ。

でもその静寂を打ち破るように、倉橋の部下の1人が叫んだ。

「お、お前ー誰だ！ー！」

『・・・・・誰？』

警棒を振るつた彼は不敵な笑みを浮かべるよつと口元をニッヒと持ち上げた。

『そりだね、俺は・・・』

彼は顔を上げ、
キツと男達の顔を見て
こう答えた。

『ただの・・・・・
自由人だ！-！-！』

広い会場の空気を大きく振動させるような大声で！

その人は

堂々と名乗りを上げたのだった！！

『ただの・・・
自由人だつ！』

私の目の前にいた彼は凜然とした様相で覆面の男達に言葉をぶつけた。

「ふつ・・・・・
ふざけるなあつつ！..」

彼が言葉を発してから少し間をおいて
彼に一番近くにいた男が襲いかかった！

右手に伸縮する警棒をシャキン！..といつ音と共に振りかざし
彼に真正面から殴りかかった！

「ふんっ、」

彼は顔を少し動かして鼻を慣らすと

左手にある警棒を右手に素早く持ち直して男の警棒を左に薙払つた
!!

ガキイイイン!!

2つの警棒が奏でる金属音が会場に鳴り響く！

だが、彼は男の警棒を完全に吹き飛ばしてなかつた。

彼は素早く身を右に回転させ、警棒をもつ腕の肘を男の右横腹に叩き込む!!

ドオオオオン!!

襲いかかった男はすぐさま私から見て右に吹き飛ばされてしまった

11

ガアアアアアアン！！

男は低く呻いた。

その声は喉の器官から絞り出したように私には聞こえた。

吹き飛ばされた時に男は頭から先に壁に当たつてしまつたようだ。

スロー・モーションのように男が床に落ちていく際に、男の耳と鼻から血が垂れていいくのがわかつた。

ドサッ といふ音と共に会場はまた静寂に包まれてしまつた。

「・・・・・！？？」

もつ男達の中には無謀に後に続いて襲いかかる者はいなかつた。

それはそつだらう。

到底、同じ人間が殴つて出した衝撃音ではない。

まるで自衛隊で使うような武器の砲撃音と同等の大きさと威力、
さらに男は吹き飛ばされてから壁に至るまで5、6メートルはあつ
たのだ。

いくら軍隊経験者でもかなりの猛者でないとあんなに人間1人を音
速に近い速度で吹き飛ばすことは出来ないはずだ。

これらの事を男達は本能で悟つたのだろう・・・

後に続こうにも、

怯えにより足が進む事はなかつた。

「…………。」

私も、まるで目の前の出来事を信じじる事が出来なかつた。

見たモノは体では理解できても
頭が、脳が追いついてきてくれない。

私は言葉を使うことすら忘れてしまったほどに
ただ静寂を受け入れるしかなかつた。

『大丈夫だよ。』

不意に声が響いた。

目の前にいる自由人と名乗る彼、

その彼は目の前の男達から目を反らしてはいなかつたけど、

私は少し顔を動かして話しかけているみたいだつた。

『紗弥加ちゃんは無事だよ。
今は警察に保護されて
いるハズだから。』

その言葉は私にとつてすぐには信じられなかつた。

でも、私から少し見える彼の横顔がニッヒ口元を綻ばせるのを見て
いたら

私はなぜか信じられると思い
喜びで心が満たされていつた。

「な、なにっ！？」

だが、私達を拘束していた男達には
突然地割れにでも飲み込まれてしまひほひの、驚愕してしまう状況
だつた。

「お、お前っ！
か、亀山はどうした！？」

男達の中の一人が叫ぶ。

自分達が有利な状況の中で覆される場面、
そんな状況ならあの男のように青ざめた表情で狼狽するのも無理は
ないだろ？。

『へへえ、あの人

ホントに“亀”だつたん
だね。』

不意にふふつと笑う田の前の自由人と名乗った彼、

だが、彼以外の私達にはそれが何を意味するかわからなかつた。

『さあね、僕がここに侵入
した時に紗弥加ちゃんの
悲鳴がしたから
助けただけだよ。』

そんな奴の事なんて知らないね。

彼はまるでそう言わんばかりに肩をすくませて両手を広げ
“やれやれ”のポーズをとつていた。

「し、侵入だと！？
周りを見張つていた
あいつらはびうした！－

またもや男達の中からそのような叫び声が上がる。

あいつらと云つのは多分あの時に出て行つた彼らだらうな

私はそう直感した。

私達が最初に男達に銃を突きつけられた時に、ボスである倉橋はすぐ自分達を二つに分けて行動していた。

一つはこの同窓会の会場である市民会館の周りを見張る集団に、もう一つは倉橋を中心となつて私達を拘束・見張る集団に、それぞれが10人程度に分かれていたので、今この会場にいる男達は倉橋を除いて8人である。

『ああ、あいつら?』

男からどうしたと聞かれた自由人は“そんな奴ら居たつける?”とも言わんばかりのとぼけた顔で明るい語調で話す。

『自分で確かめたら?』

その言葉にはじかれるように会場の外を窓から覗き込んだ男達だつ

たが・・・

「・・・・・・！」

そ、そんなバカな・・！」

やがて絶句して絶望感に打ちひしがれるようになり、3歩後退り座り込んでしまった。

私も遠目ながら今いる場所から窓を見ていたが、
すぐさま飛び込んできた映像に信じられず、窓に駆け寄つて覗きこんでいた。

あの時殴られた横腹の痛みなんて、忘れてしまっていたのだ。

「…………つ！！」

私は息を呑んだ。

窓の外に広がる光景はある意味信じる事が出来なかつた。

外には人が倒れていた、いや人達が
ここから見えるのは5～6人くらいなのだけど・・・・

それはもう驚愕の光景だつた。

まず倒れている男達は皆ピクリとも動かない。しかもその倒れてい
る格好が人知を越えている。

左側に倒れている男はもう 倒れているではなく、会場をぐるり
と囲むツツジの花壇に頭から突つ込んだ形になつていた。

中央に見える2人の男はそのまま舗装された会場の入り口で倒れ伏
していたが・・・・

手が、腕がありえない方向に曲がつていた。

最後に右側にいた男達は会場の外側にある建物・・・

確かに何かの倉庫だったとおもうけど、そこそこ全て叩きつけたようになっていた。

ここからでは距離があるから解らないけど、顔から赤い液体らしきものを六からとこつ六から垂れ流していた・・・・・

『外にいる君達の仲間は排除させてもらつたよ。

今、周辺を囲む警察はこの会場の周りにあるトラップを解除しにかかるてるよ。』

自由人である彼は左手で目の辺りをポリポリとかいて平然と話していた。

『もうすぐ解除してここに踏み込んでくるのも時間の問題だよ。』

セツニヤシハセツセ

彼は驚愕して自らの思考を止め始めていた男達に手を向け
視線をスッと細める。

『あんたたちに少しでも
仲間意識つてのがあるの
なら、・・・』

話しつつ体の下方にあった右腕を挙げて ピッと指を突き付けた彼
は、

口調を低く、それでいて耳に通る音程で話した。
指を男達に突き付けたま
ま

『今すぐここにいるみんなを
解放して投降しろ

そしたら・・・

あんたらの命だけじゃなく
仲間の命も助けてやるー』

「それは……
断るつす……」

自由人と云つた彼のその低く唸る声を打ち消すように会場の中を別なる男の声は響いた。

「 つーと、友彦……」

覆面の男の1人がボスである倉橋に氣づき言葉を紡ぐ。

あの時に吹き飛ばれた倉橋は彼の反撃により全身を強く打つていた。

だが、ナイフ^ビしでの反撃だつたため、外にいる男達や紗弥加を襲つたあの男よりは身体を襲つた威力が軽減されていた。

だが、それでも再び立ち上がるまでには至らなかつたのだろう。

両脚をたたんだま

肩で息をして、顔を苦痛で歪ませながら凛とした態度で立つていた自由人を睨んでいた。

「これが……
なにが……
わかるつすか……」

まだ肩を上下に息している倉橋は右腕をあげて手の中にある物をみ

んなに見せつけた。

それは手のひらにほぼ収まるような黒い物体だった。

その黒い物体の上部はまるでライターのように蓋が開いていて、中には赤いボタンのようなものが見えた。

「 つーもしかして、」

『爆弾の起爆

スイッチだろ?』

私の頭によぎった事を彼はすぐさまに喋っていた。

(「えつ・・・・・!?)

私はすぐに軽い引っかかりを感じた。

「 お見通しつすか・・・・・
俺にはまだ切り札が
あるつす。」

倉橋は赤いボタンに親指を静かに置いた。

「友彦！…それは
使わない約束だろ…」

男達にとつて倉橋の行動は意外だったのだろう。
会場にいた男達は次々と
「やめろ！」「俺達まで巻き込む気が…」
等々、次々に非難の声が挙がる。

「ひねりこつすよ…」

また会場に響くポソリとした低い声、

倉橋の唸る声に男達はピタッとその非難の声々をやめる。

「俺にとつけや お前らの
命もどうでもいいっす。

」「つらみ～んな

巻き込んで死ぬつもりっす

から・・・・

もはや悪意を超えた狂氣だった、
倉橋の顔を、心を覆っていたのは・・・

私はもう・・・

立ち上がりない程の脚の震えで全身をふらつかせていた。

『やつてみれば?』

そんな狂氣に支配されそうな会場に響く一陣の言葉、
私の目の前に背中を向ける彼は表情を明るいままでずつに言葉を紡
いだ。

「なつ・・・!?

『やつてみればって言つたの
それともできないの?』

そんな態度の彼に倉橋は驚いてしまつ。

「バ、、、馬鹿な！

本物なんだぞ！』

「ハツタリじやねえ！..！」

彼の軽しつな声に男達は驚愕の声で返す。

『それとも・・・
怖いのかな？』

途端に彼の言葉が重くなる。

『所詮、独りよがりの
逆恨み野郎では
命すら賭けられないか？』

彼の完全に侮辱する挑発に倉橋の口調が変わつていった。

「・・・・・
なんだと、」

私でもわかる、
あれはもう・・・

完全にキレた人間の顔だ。

「そんなにどうなら

何もかも
吹き飛ばしてやるよ
!!!!!!」

目がイッてしまつた倉橋は右腕を地面に叩きつけそつた勢いで振り上げた！！！

「ぐ、倉橋っ！！

やめう————つ！！

私の目にはハツキリ見えた。

倉橋の親指が起爆装置の赤いボタンをカチッと押す所を・・・・・

私の目の前には

白く輝く閃光が広がつて

！－！－！－！

私は灼熱の衝撃波に包まれた。体のあちこちが破れ、千切れ

！－！－！

「これは・・・・・
もう酷いですね、、、」

「ああ・・・・・」

辺りは見渡す限りの崩れたコンクリートの残骸、、、
そこかしこに広がる赤い染み・・・・・

残骸の端々に紛れているような人間の欠片・・・・・

今、そんなような風景を2人の警察官が絶句の様相で眺めていた。

大井町の人質籠城事件は

最悪の結果を迎えて終わってしまった、、、

死者は犯人グループを含めて80人余り、

生き残った人間は誰も居なかつた。

警察は犯人グループが爆弾を爆発させたとして彼等を被疑者死亡のまま送検した。

「どうして・・・
こんな事に、、、」

「え、、、み、、、」
恵美子～～～つーーー！」

「あつし・・・
篤いいいつーー！」

同窓会に出ていた彼等の親達は、
突然起きた悲劇に
ただただ悲しみのあまり叫び続けるしかなかつた。

「え、エミ

お姉ちゃん・・・」

いや、訂正しよう

1人生き残った女性がいた。

古山紗弥加、

あの時

彼に助けてもらつた彼女は警察に保護されていた。

そして、大井警察署に移送中だつたために難を逃れたのだ。

「う、ウソだよ・・・ね？」

悲劇を聞いた紗弥加は警察官に連れ添われて
もはや瓦礫となつた市民会館に来ていた。

そして、目の前の惨状を目の当たりにして放心して膝から倒れ込む。

二二

こんなのは・・・・

「んの・・・・!」

彼女は頭にある悲劇を受け入れられずに両手で頭を抱える。

彼女の絶望の叫びが崩れ去つた会場の残骸に響き渡つていった・・・

「さやひつひつ……」

私は叫んでいた。

あんな悲しい顔の紗弥加を見たくなかつたから。

涙で顔を絶望に染め上げて崩れ落ちたあの子を見て胸が締めつけられそうだつたから　　――

気がついたとき

私は両目に溢れ出でくる涙に気付いた。

思わず私は手を頬に当てて涙の流れた跡をなぞつていく。

「えつ！？」

私は驚いていた。

私は見ていたハズだ。

瓦礫となつた建物を前に両手を頭にあてて崩れ落ちた紗弥加を！

あの時に、ほどばしる爆風で全身を焼かれるよつた痛みを感じていたはずだ！！

でも、・、・、・、？

私は思わず自らの全身を素早く確認する。

何ともなつていなーい！！

確かにあの時殴られた横腹はまだ少し痛いけど・、・、・、・

同窓会に着ていつたスーツは傷一つ破れ目一つついていなかつた。

「ど、どうして・、・、・、？」

私にはわからなくなつた。

確かに爆弾は爆発したハズ・、・、・、？

爆弾のあるテーブルはまだクロスがかかつたままだし、

そのクロスも吹き飛ばされていない。

あの時、倉橋がボタンを押す前の状況にすべてが戻っていた。

いや、戻っていたのか？

もしかしてこれが“白日夢”といつやつなのだろうか？

しかし、私はある声を聞いて頭で思考していた事から現実に引き戻される。

「う、う……」

「うううう……」

「い、痛え……」

「痛てえよ……！」

私は声のする方を辿る。

それは私の前にある床から聞こえていた。

みると、私達を拘束していた覆面の男達が呻いていた。

驚いた事に、

男達の服装はボロボロになっていた。

まるで、そう

爆発にでもあったよ！

しかも、私とは違う男達の服装にはうつすりと血がついていた。

おそらく内出血をしているのだろう。わずかに見える肌の部分は青紫の斑点が浮かび上がっていた。

男達は全身を両手で抱えて転げ回つたり、痛みのあまりに失神する者もいた。

「え、恵美子ちゃん…
だ、大丈夫？」

私が振り返ると、そこには1人の女性が立っていた。

私の同級生の1人である今西さん、バレー部では共にレギュラーとして参加していた人だ。

「大丈夫よ真希子ちゃん、
真希子ちゃんこそ
大丈夫？」

一応、彼女の全身をみてみたが、彼女のブラウスもなんともなつていなかつた。

「私も爆発で全身に痛みを
感じたのだけど・・・。

恵美子ちゃんの叫び声で
気がついたら元に
戻っていたの「

!

私だけじゃない!!

私は辺りのざわめきに思わず周りを見渡した。

私の同級生達も「ば、爆発したのに…」「ビ、ビーブンなつてこるの…」等々

それぞれお互いに疑問を話し合つていつだつた。

だが彼は先程爆弾を起動させた男と対峙した時とは様子が違つていた。

彼はこちらを向いていた。

私はその顔になんだか見覚えがあるような気がしたが、

彼が誰かを両手で抱いているのに気がつき、そちらに気が取られてしまつた。

彼は佐古川君をいわゆるお姫様抱っこして立つていた。

私は佐古川君を見て驚いていた。

佐古川君はあの時に倉橋達に痛めつけられたため顔や全身が腫れ上がりつていた。

だけど、今の佐古川君は着ているスーツは赤く汚れていたが、顔や手などスーツから見える部分がきれいに治つていたのだ。

撃たれていた脚も出血が止まつていて、傷口をタオルが巻いてあつた。

「あつちゃん！」

「篤つ……」

佐古川君に駆け寄る2人の同級生、彼等は中学から同じ野球部で頑張つていた阪本君と松本君だろう。

『もう大丈夫、撃たれた跡はちゃんと止血して治療したから、

怪我も殆ど治したよ。』

そういうて二ヵつと笑いかける彼の笑顔は佐古川君の親友や私達に力を与えてくれるみたいな明るさがあった。

『ただ、殴られた時に頭を強く打つたかもしないからなるべく急いで病院で診てもらつたほうがいい』

言い終えた彼は佐古川君の身体を目の前の2人に託した。

2人は佐古川君をゆっくり床に降ろして様子を見ていた。

『さて・・・・と・・・・』

佐古川君を託してひと息ついた自由人は私のいる方向に歩いてきた。

そしてそのまま私や同級生達を通り過ぎて会場の入口にいる男の下

に歩いていく。

その男も倉橋の仲間だったのだが、なぜか他の男達とは違い全身の傷が比較的少なかつたのだ。

『と、云うわけで
僕達は早く病院に
行きたいんだ。』

自由人は座り込んだまま自分に怯えている男を見下ろして穏やかに話した。

『だからさ・・・・・
この入口を開けてくれない
かなあ?』

ここまではまだ“依頼”という形なのだったが、

次に聞いた声はもう・・・・

『嫌だつていうなら・・・・・

お前の命、今すぐ
消し飛ばすぞ。』

ドスの効いた静かな洞喝だつた。

「はつ・・・・・
はい・い・い・い・い・い・い・
わ、わかりましたから
殺さないでくれ！-！-！-！」

私にはわからないけど、

おそらく男達はあの爆発を本当に喰らつたのだらつ。

理屈はわからないけど、

あの怯え方は尋常ではない。自由人に脅された男はすぐに会場の入口を解除し始めた。

『ねえ、

おにいちゃん、、、

まあ、だあ、、、』

まるで幼い妹が兄に話しかけるように

座つて両手を顎に乗せて

「ハニコ」としながら

会場の封鎖された入口を開錠しようとしている男の背中から自由人たる彼が話しかけたが、、、

男性にしては全く似つかわしくない女性みたいな声、

おそらく裏声だと思つただけど

で話しかけたので、

私をはじめ何人かの同級生は固まつてしまつた。

でも・・・・・

「ふつ、、、ふふふふふつ」

中にはこれが笑いのツボを突かれたみたいで、つい吹き出してしまった同級生もいた。

私の後ろにいる真希子ちゃんもその1人だけど、私もそれにつられてついに笑みがこぼれてしまった。

今、会場の入口は私達が拘束された時に入口の引き戸についていた取つ手を鎖と南京錠で雁字搦めにされている。

それを彼に頼まれた（脅された？）男が南京錠に鍵を差し込んで開けようとしていたが、＼＼＼＼＼

身体の痛みと恐怖による為か、動きが緩慢なため遅々として作業が進まなかつた。

それで今は同級生の何人かの男性が手伝つて入口を開けようとしていた。

（「ふふつ、そういえば
あの人も
こういう人だつたよね。

誰かが落ち込んでいたら、
傷ついていたら放つて
おけない。

いつもおどけて

励ましてくれたよね

・・・・・

私はこの人の姿にある人の姿を重ねていた。

(「もしかして・・・・」)

私が何かを確信しようとした時には
彼の姿は目の前から消えていた。

「えつ・・・・・?」

私はすぐさま辺りを見回して彼の姿を探した。

彼は私の後ろ側にいた。

彼は座り込んだまま放心していた男の目の前に立っていた。

男は焦点を床に向けていた。

口は少し半開きとなり手には黒い機械を握っていた。

全身はボロボロとなっていたが、床に倒れ伏した男達より血の跡が少なかつた。

その男 倉橋はスイッチを押した後、何かが消えてしまったような感じがするのを私は見て感じていた。

『 で、気分はどうだい？

全身を爆風で焼かれた
気分は？』

その言葉で電源を入れられたように、倉橋はハツとした感じで顔が動き、辺りを見回し始めた。

やがて、すぐに目の前の光景に気付いて、・・・、

手にある黒い機械の先端にある赤いボタンを押した。
しかし

力チツ

ボタンを押す音はすれど、彼が期待した爆発は何時まで経つても起きる事はなかつた ！！！

力チツ カチツ カチツ

力チツ カチツ カチツ

力チツ カチツ カチツ

・・・・・

何度も何度も、、、

倉橋はボタンを押すが、
テーブルクロスの下からは光も衝撃波さえも吹き出さなかつたのだ。

「なぜっすか！？」

「なんで爆発

しないっすか！」

私の目の前にいる男は完全に狼狽していた。

あの時に私達を拘束した時に見せた余裕など表情なんてどこを探しても見つからなかつた。

『“なんでなんで”って
・・・・やあ』

そつ言ひつと肩を落としてガックリとうなだれた自由人たる彼は、やがて巻き戻るよつによつに姿勢を元に戻して微笑を浮かべて答えた。

『あのさあ、なんで
“それ”が起爆スイッチ
なのかを僕がどうして
知つっていたのだと思う?』

「あつ！」

私は最初に引っかかっていた事を思い出していた。

あの時、私達がテーブルの下の爆弾を見たのは拘束されて間もない時のハズ。

その後、倉橋はすぐにクロスを元にかけ直したため会場の外から見ることは無理がある。

おまけにあの爆弾は時計なんてタイマーは付いていなかつたから秒針が紡ぐ機械音もしなかつた。

つまり、田の前にいる自由人には知りようがないのだ。

「…………」

私がそんな事を瞬時に思考していた間に倉橋は半ば這いつぶぱつたまま爆弾があるはずのテーブルの下に向かっていき、、、、

かけてあるテーブルクロスを引き下げる。

「なあつつつつーー?」

何度、彼等の驚愕の叫びを聴いただらう。

何度、私は驚くべき光景を目撃したのだらう。

あの時に見た爆弾にはよくアニメやドラマで見るよつた筒状のダイナマイトが束になつて機械と接続したはずだった。

だが、今私の目の前の爆弾にはある物が散りばめられて埋め込まれていた。

それは例えるなら“黒い飛礫”だつた。

大きいもので直径3センチの黒い石の飛礫がダイナマイトや機械に無数に刺さっていたのである。

ダイナマイトの筒が白色だったので、まるで半紙に墨汁の飛沫をぶつけたような有り様だった。

その黒い飛礫は時折“バチッ”という電氣音がしていた所を見ると何かの機械なのだろうか・・・・?

『ちょっと、隠し玉を使わせてもらつたよ。』

と、余裕の表情を浮かべながら右手の人差し指と中指を立てて口元に当てる自由人。

それは彼のちょっとしたカッコつけのポーズなのだろう。

『ま、先程のやつも
とつておき
なんだけど、ね』

彼はそのままのポーズで口元をニッと笑わせる。

「 ！？

お、お前なにも『そんな事
はじうでもいいよ。』

倉橋の疑問を自らの言葉で搔き消す自由人は間髪入れずに手に持つ
ている警棒を投げつけた！

バシッツツー！

警棒は倉橋の持っていた起爆スイッチをはじき飛ばす。

「ぐつ……」

彼は倉橋から転がり込んだ起爆スイッチが足下に転がったのと合わ
せるよう、 、 、

バキッ！

足で完全に踏み潰した！！

まるで巨象が枯れ木を踏みつけるように黒い機械は粉々になる。

『 これでお前は
切り札もない。
頼りの仲間も
あのとおりだ。』

「 なつ！？」

倉橋はしばらく放心していたので気付かなかつたのだらう。

彼は口元にあつた右手をビッと人差し指を勢い良く倉橋に突き出した！

『これで・・・・・

お前の独りよがりの復讐は

終わりだよ！－

倉橋 友彦！－』

彼の啖呵が、

彼の豪声がこの悲劇にピリオドを打つたのだった。

「なつ・・・・・・・・?

なぜ俺のフルネームまで
知つているつすか!!」

倉橋も私もなぜ彼が知つてているのか驚いていた。

だが、私はすぐに前にも頭によぎつたことを思い出しすぐに平静を保つことができた。

「（やつぱり・・・・・）

そうなんだね・・・

貴方は・・・・・！

『それだけじゃないぞ、
お前が今回的事を起こした
理由、いやみんなや
篤君に復讐する理由も
知つてるよ。』

自由人を名乗りし彼は余裕な笑顔を浮かべてはいなかつた。

その表情は後ろにいる私には見ることができなかつたが、

私にはわかつた。

あの人なら
この声なら

とても悲しい事を知った時にする悲哀の表情だらうから

「何があったの？」

私はあの時、地元じげんにいなかつた。

だから彼がなぜこんな事をしたのかわからぬ。

だから、聞かなきやいけない。

もちろん彼のした事は許されないことだ。

でも、相手の言い分も聞かずにその行為だけを非難することも、
、
、
、

私はやつてはいけないと思う。それは私の先生としての主觀も含ま
れていた。

『 話してもいい

のかな？

亮君、いや今川君？』

私の問いかけを聞いてからしばらくして自由人である彼はくつと振り返つて私の後ろにいたある男性に問い合わせる。

「お、お前・・・！

なんでその呼び方を？』

あの時、倉橋に“今川センパイ”と名指しされた今川君

たしか今川亮司君だったつけ

は、驚いた声を発していた。

「その呼び方をする奴なんて

・・・・・・・？

……ま、まさかお前は

『 そんな事はいいから』

また自らの言葉で相手の言葉を書き消す彼、

『 君の両親も関係する事だけ

ど、話していいかな?』

彼はスッと目を細めて今川君を見つめた。

その視線には相手の遠慮と、ある種の非難が含まれていて、

・・・

私はそう見えた。

「・・・・・ ああ、
わかつたよ。部活の先輩と
してコイツを庇えなかつた
俺にも責任があるからな」

そう言つと今川君は彼の視線に応えるように若干見つめ直し頷いた。

『・・・・・ ここにいる
みんなの中にも知つて
いたり知らなかつたり
する人もいるかも
しれないけど

・・・・・ 聞くべきだと

僕は思つよ。』

そう言つと、彼は長話になるのがわかるのか、ひと息深呼吸をしてから話し始めた。

倉橋の家は元々地元でも名士の家で
彼等の住む地区、高津野ではいつも地区の代表として大井町の議員
としても有名だったんだ。

だが、彼の祖父

まあ、お爺さんは町にとっては頭の痛いほどの偏屈な人だったんだ。

例えば、地区の墓地として提供した自分の土地を完成した途端に“
返せ”と喚いて町役場に怒鳴り込んできたり、

また、同じ地区の近隣住民とも身勝手な行為によるトラブルが耐え
なかつたらしいんだ。

おまけに彼の息子、すなわち友彦の父も彼から議員の職を引き継い
でからは、かなり横暴な事をしていたそうなんだ。

だが、そんな時に。

大井町を無慈悲に襲つたあの水害、
“水良川大水害”が起こったんだ。

不幸な事に、倉橋の家は地区の中で水良川から一番近い場所だった。

これは彼のお父さんが川釣りを趣味にしている事にも関係しているんだけどね。

一番、水害でも威力を受ける所にあった倉橋の家はあつという間に川水により崩壊して流されたんだ。

その時、家にいた倉橋の両親とお爺さんも一緒に流されて・・・

自宅があつた場所から何百メートルも離れた場所から遺体となつて発見されたんだ。

自宅の残骸と共に・・・ね。

生き残つたのは、その時に部活動で帰宅が遅れた友彦と麻里の兄妹だけ、

あと残つたのは無惨に生活を形成していた家の名残だった。

「で、でも・・・
それだけなら・・・？」

私は彼が一息ついたのを見計らつて口を挟んだ。

あの時の大水害は大井町の半分を襲つたと聞いている。

私の実家や紗弥加の家は山の奥側にあつたため難を逃れたが、水良川周辺の家々は泥水に浸かつてしまい、数年たつたいまでも家の壁から砂や乾いた泥の屑が浮き出るのだそうだ。

『いや、倉橋が復讐した理由はここからなんだ。』

そして、さりに彼は語り出す

水害が収まり水が引いた後、無事だつた世帯は被災した世帯に救援に向かつたんだ。

昔からこの大井町は町を横切る水良川の氾濫には悩まされていた。

だから、こういった助け合いは地区ごとにしつかりしていくて水害から立ち直るのも速かつたんだ。

でも・・・・・

高津野にあつた倉橋の家には、 、 、 、 、 、

誰も救援に来てくれる近隣の世帯がいなかつたんだ。

部活動から帰ってきた友彦ら兄妹は家があつた場所で何時までも待つていたんだそうだ。

でも、両親も祖父もいないんじゃ金銭や食料も確保できない状況で何時までも待つことなんて出来やしない。

彼等は食料を求めて地区の公民館に向かっていったんだ。

幸い地区の公民館は川からかなり離れていた事と、水害対策で數メートル高く作られていた為、水害の難を逃れていたんだ。

そこで、地区の人達が被災した人達に炊き出しをしていたのだけど・

彼らは、・、・、・

村八分にされてしまったんだ。

「バシッツッ！－！」

「あうへーーー！」

「何しに来やがった！
倉橋のガキ共！！」

「お、お願いします！
家が無くなつていて
お父さんやお母さん・・・
お祖父ちゃんがいな
いんですーーー！」

「お願いです。一緒に探して
くだせーーー！」

「いひるやこーーあれだけ
俺達に対してワガママ
いこやがつて！！」

「わうわーーーんな時だけ
都合のこゝ事
言わないでよーーー！」

「お前らなんかにやる
飯なんて無いよーーー！」

「ヒヒヒヒ、

「いの地区から
出でおいきーー。」

「そ、そんな・・・」

『で、その時に倉橋たち兄妹
を追い払ったのが、』

「俺のオヤジだつたんだ。」

「えつ・・・・・・?」

突然、今川君がポツリと話しかけた内容に驚いてしまう私だった。

「オヤジ・・・・
相当コイツの爺さんに
煮え湯を飲まされててさ

オヤジは町役場の職員

だつたから、かなり
腹に据えかねてたらしい

そう言う今川君の顔を何かやり切れない想いで一杯の表情を映し出
していた。

『まあ、気持ちはわかるよ。

当時の高津野地区の住民
感情は水害によつて
かなり追い込まれていた
からね。』

そう言う自由人の顔も今川君と同じ表情をしていた。

『そして』

地区の住民の助けを得られない兄妹は自分達で両親と家を探して周
辺を探し始めた。

でも、彼らの行動力なんてそんそんタカが知れている。

だが、彼らは・・・
諦めずに探していたんだ。

でも・・・・・・

水害からあつて2週間もしない時に・・・

妹の麻里さんが自殺したんだ。

「 つー?」

彼が話し続けるあいだに私は息を飲んだ。

じゃあ、彼は家族をすべて失ったの？

あの水害のせいで　！！

私の“信じられない”という表情を知らずに彼は話し続ける。

友彦が気づいた時には高津野にあつた高台から身を投げた後だった
そうだ。

遺書は見つかからなかつたけど、携帯のメール画面に「ごめんなさい
兄さん」と未送信のまま遺されていたんだそうだ。

だが、地区の住民達は彼女の葬式すら手を貸さなかつたそうだ。

この時に倉橋家にはもう親戚筋はいなかつたそつだからね、

元々、ある意味悪名高い家である事やその性格からか親戚筋の中でも嫌われていたし、この水害で唯一の分家も亡くなつっていたそつだから、

そんな状況でまだ高校生である友彦には家も資金も何もかも無くして彼には葬式なんて出来なかつたんだ。

結局、葬儀も行えず遺体だけ火葬してもらつた友彦は

ある日、地区から姿を消した。

麻里さんの遺骨だけを持つて、
残骸となつた家を残してね
.....

『その後、麻里さんの件で
警察も不審死として
動いたみたいだった
けど、、、、

地区的住民達は

“倉橋の一家はみんな
水害によつて亡くなつた
もしくは行方不明に

なつた。 ”

と、口を揃えて言づ
ようになつて。

全ては闇に葬られたんだ。 ”

一通り話し終えた彼は、再び大きく息を吸い込み「ふう、」と溜め息をついていた。

「・・・・・」

誰もが言葉を失つていた。

自分達の住んでいた町でそんな事が行われていた事に、

もちろん、ここにいるのは全て高津野地区の人達だけではないが、
自分の親がもしそれを知つていても知らない振りをしていたのかも
しない、という事実に言葉を失つていた。

だが、突然の怒号により静寂は破られた。

「ああー…やつだよーー！」

それは彼、

倉橋の憎悪に満ちた怒りをはらむ声だった。

「あの時に俺達に酷い事した
奴らに復讐するために
俺は計画を練つたんだ。」

また彼の顔はあの時にスイッチを押す前に見せた憤怒に歪んでいた。

「それで、やつと今日の
同窓会が行われるのを
知つた俺は準備を整えて
いたんだよ！！」

『今日の同窓会に佐古川君が
幹事として参加する事も
知つたからだろう？』

「ああ、こいつ高校を
卒業してからめつたに
こつちに帰つて同級生
にも会わなかつた
らしいからなあ。

やつと同窓会という
表舞台に出てくると
知つた時には嬉しさに
震えたよ。」

もはや普段の倉橋の声じゃない。心の奥に隠していた本物の“彼”、

私は一瞬

身体を震えさせてしまつ。

「幸い、爆弾やこいつらは
ある所から容易に調達
出来たからなあ、」

『なんでみんなを
巻き込んだ。あんたに
酷いことをしたのは
彼らじゃなくて
彼らの親達だろ?』

自由人はもう悲しみの感情を持つていない。むしろ静かな怒りを宿すような声をしていながら私には聞こえた。

「何言つてんだよ。
それじゃ俺と同じ痛みを
味合わせ
られないだろ?』

『・・・・・』

「だからコイツら諸共
吹き飛ばしてコイツらの
大事な者を奪えば
少しはわかると思つてさ」

ハハハハハハ・・・・・

そんな乾いた狂気に笑う倉橋の姿に私はもう彼に対する怒りは消えていた。

彼も被害者だったんだ。私の親も知っていたのかな、もしそうなら、私も彼の事は、、、、

そんな事を考えていた。

「あとは佐古川さえ

俺の手で始末したかった。

当時、野球部のマネージャーをしていた麻里は佐古川とつきあつてたらしいからなあ

『そちらしいね、だが、くらは』

「アイツが麻里を殺したんだ！！

アイツ最後に佐古川に会いにいつたらしいからな！！

だから

アイツだけは・・・！」

「違う・・・」

一人の言葉だけが響く会場を別の誰かの言葉が響く。

それは、氣を失っている佐古川君を抱き寄せていた阪本君だった。

「あつちゃんは麻里ちゃんを
殺してなんかいない！」

むしろ麻里ちゃんがなんで
死んだか調べてたんだ！」

『・・・・・』

「なつ・・・・・？」

阪本君の話した内容は倉橋を大きく戸惑わせた。

「あつちゃん、携帯で
麻里ちゃんに呼び出された
けど、、、

あつちゃんが駆けつけた
時には高台にはじこにも
いなくて・・・・・

でも、近くの人に聞いても
“水害で行方不明
になった”
としかわからなくて・・・

高校を卒業して大学に
入つても、帰郷した時は
時間の限り調べてたんだ！

もちろん友彦、お前の
行方も探してたんだよ。」

だから同窓会にも同級生にも会つ時間がなかつたんだ。

私は当時の佐古川君を思い浮かべて納得していた。

彼は野球部のキャプテンを務めていた時から責任感は人一倍だった
から、

「なんで麻里ちゃんが
自殺したのか僕にも
分からぬいけど、

……あつちやんにこんな事
をするのは間違つてゐる！」

普段は温厚な阪本君がこんな怒りを含んだ事を言つなんて、

私は驚いていた。

「じゃ、じゃあ麻里が
自殺した理由は……？」

『だから“独りよがり
の復讐”だつて
言つたんだよ。』

また、いつもとは違う低く重みのある口調をした自由人の声が会場
の雰囲気を切り裂いた。

『ついでに言えれば……

お前なんかに人を恨む
権利なんてこれっぽっちも
無いがな……！』

自由人たる彼の声が倉橋を打ちのめした。

「…………！」

突然の冷たい指摘に倉橋は言葉を失った。

『僕が知らないと思った?
父親の権力を後ろ盾に
お前もそれ相当の事を
していただろ?』

まるで普段は優しい猫が突然鋭い目つきをして睨むように、彼は倉橋を見据えた。

「…………な、なぜ
それを…………」

『それだけじゃない。

お前が知りたい妹の自殺の
理由だつて
お前はとつぐに!』

自由人がその先を続けようとした時だった。

「や・・・・やめ・・・て・
く・・・れ・・・」

「あつちやん！？」

苦じくて、か細い声が彼の言葉の紡ぎを止めた。

私達が振り向くと、先程まで意識を失っていた佐古川君が無理やり立ち上がろうとしていた。

全身をぶるぶると震わせながら身体に力を入れるように起こうとするが、あれだけ痛めつけられたのだ。いくら治療をしたとしても無理がある事くらいわかっている。

「あつちやん、動いけ
駄目だっ！」

すぐここにいた阪本君が止めに入る。

「カズ・・キ・・・
お、・俺は・・・・

『篤君。』

いつの間にか、彼は佐古川君のそばにいた。

そして、しゃがみ込んで仰向けに横たわる佐古川君を見つめた。

「た・・・の・・む、
こ・・・・へ・・・
ま、ま・・・りのた・
め・・にも・・」

弱々しい声

先程のあの時まで

あんな立派な男の人の声と同じとは思えない。

私はなんだかやり切れない気持ちに心が締め付けられた。

『
・・・・・
そつか・・。』

そう呟く彼は微笑を浮かべて立ち上がり・・・・・
ゆっくりと倉橋に向き直った。

目に力強い意志を宿して

。

篤君は麻里ちゃんが自殺した理由を知ってる。でも、その元凶である奴に彼は危害を加えなかつた。

何故かわかるか
？

元凶
· · · 奴
· · ?

篤君はな、たとえ奴を見つけても復讐なんてしなかつたと思うよ。』

一息ついてさらに眼光を強める。

『誰だつて、いつ不幸になるかわからないさ、
明日、地震にあうかわからぬし
誰かを失うかもしれない』

• • • • • •

「でもな、それを誰かや
何かに復讐するなんて
間違つて いるんだ。

人間は弱いよ、

誰かや何か、対象があれば
それに何かをなして、自分の
心を満たそうとする』

「・・・・・・・・・・・・

『特に、どこかの世界で
あるような・・・・・
自分達が被災して同じ国
の人がそうならなければ

恨みたくなる気持ちも
わかるよ。』

「・・・・・・・・・・・・

『でもね、そんなのは
ただの“執着”さ。

そんな執着に固執して
他人に牙を向いて
何になるつていうんだ。

そんな事をしても
自分が虚しいだけさ。』

『自分は自分、他人は
他人さ。僕はそんな執着
なんて持ちたくない。』

「・・・・・・・・・・・・」

『大切なのは
歩みを止めない事、

他人に復讐などの執着を
持たず、自分に
出来ること、
やるべきことを精一杯
やってみる。

それが　僕の自由人と
してのあり方だし、
』

『この世界で生きるために
必要だと僕は思うから！！』

バンッ！！

彼が全てを語り終えたタイミングと合わせるように、
会場の入り口のドアが大きな音を響かせて解き放たれていたのだ
った。

入り口が開け放たれた瞬間、多数の警察官が会場に踏み込んできた。

私達はようやく全てが終わったんだなと安堵感に浸ろうとしていた。

だが、私達は気づかなかった

彼の心にまた憎しみが沸々と湧き出していた事。

執着だつて！？

それの何が悪いんだよ！

俺はあそこを追わされてから住む場所もなく、帰る場所すらなかつた！

公園の水で飢えを凌いで、草木を食べて腹を満たすしかなかつた！

運良くあこづらに捨てられて・・・

生きるために色々とやって・・・

時にほやりたくない事もやつてきたやー！

でも、それもあいつらに復讐するために生きたいからやれたんだ！

それなら生きるために執着を捨てなければならなかつたのかよー！

「うわっ！！」

「ま、待て！！」

「よ、容疑者が逃走したぞ！！」

私達が緊張から解放された刹那、会場の入り口に突っ込んでいく黒い影があつた。

それはあの倉橋だつた。

身体はあれだけ傷付いて、彼に吹き飛ばされて全員が転むよ」な音がするくらいの痛手を受けているのに！

彼はまるで何ともないような速さで入り口にいた警察官達に飛び込んでいった。

警察官達はまさか自分達に突つ込む人がいるとは思わなかつた。

もちろん彼等もプロだから予測はしていたのだが、

倉橋の予想もしない突進力に驚いて弾き飛ばされてしまった。

もはや彼は精神が肉体を凌駕してしまっていたのだろう。

私が気がついた時には彼の姿はもう会場から出ていってしまっていた。

『…………！』

『待てっ！…』

とつたに自由人たる…………

いや、あの人も会場の入り口に猛獸のごとく走つていった。

「…………まっ、

待つて！！！』

私もつられて走り出す。

いや、ここであの人から離れるわけにはいかなかつた。

聞きたいことが一杯あつたから！

「恵美子ちゃん！」
「塩原さん！！」

背中で同級生の声を聞きながら、私は会場から外に飛び出した。

「はあっ、はあっ・・・！
ど、どこに行つたの？」

私は息を切らせながら道の真ん中で半ば震える脚を手で支えるように抑えていた。

こういう時にスーツは向かないわね。
私は履いているパンプスを忌々しく見つめた。

私が会場から出た時にはあの人のわずかな後ろ姿しかなかつた。

とにかく追い付かなきや ！

私は一目散に走り出して、・・・、

気がついた時にはこの場所にいた。

確かここは市民会館から近い大通りのはず、地元から離れた何年かですっかり町の様相が変わつてしまい
元いた会館にもすぐに戻る事ができなかつた。

「・・・・・・あの人、
どこに・・・・！」

そう私が辺りを見回した矢先だつた！

ブウウウウウウウウ！

どこからか聞こえてきたエンジン音に私は振り向いた。

大通りの一方からトラックがこちらに向かつて暴走してきている！

それはよく町で見かける運送会社が使う小柄なトラック

2セトラックというのだけど

が重低の唸るエンジン音を響かせながらどんどん迫つてきていた

！

「くく・・・・・！」

私はとつとて身体を投げ出して道の端に転がる！

私の元いた場所をトラックが轟音と共に通り抜ける。

だが、その時に履いていたパンプスが脱げてしまった。

「あつ！」

私は思わず立ち上がるが、足に走る痛みにおもわず顔をしかめる。

「痛つ！…」

脱げたパンプスはトラックの後輪に道の反対側に弾かれてしまった！

そんな僅かの間に暴走するトラックはすぐさま離れた所で起用にも反転させて

また私に突っ込んできた…！

反転した際にスピードが緩んだ時に私は運転席を見て驚く。

「ぐ、倉橋…・・・君！」

こんな時でも教師の癖が抜けないのか“君”付けにしてしまった私を自分で恥じる。

だが、私にはもう思考する時間が残されていなかつた！

もう私と トラック の間隔は 5 メートルもなかつたからーー！

「死ねええええええーー！」

倉橋の口からはそんな呪詛を流しているように私には見えた・・・

『 恵美ちゃん！ 危ない！ ！ 』

突然、突風が私めがけて吹き抜けたと思つた瞬間！

私は誰かに抱き寄せられていた。

彼は器用にも全身のバネをかけて体勢をくるりと回し、

両足で地面に着地した！

地面を彼の靴が引き裂く音が鳴り響く――

私が氣一した時には通りの横にある菫生にした

芝生には一本の先が私達に向かつて続いている。

『大丈夫、立てる？』

「えつ？」

私を抱き寄せていた彼がのぞき込んでくる。

距離が近いのか私は少し顔を赤らめて応える。

『・・・・・』

『そ、そつ・・・（汗）』

彼も気がついて顔が朱くなる。

ホント、女の子には苦手なんだから

少し苦笑する私をゆづくじ優しく降ろしていった彼は
やがてある方向を見つめた。

それは大通りであれだけ暴走していたトラックが私達のいる芝生を
踏みつけてこちらに向かってき始めていた。

『もう・・・・・

自らの憎しみ・・・・・

執着を断ち切ることも

出来ないのか、、、

そう呟く彼はバッと後ろに飛び退き、背後に立てかけていた鉄の棒
を引き抜いた。

それは大井町の成人式に植樹する際に植えた樹を保護するために周
りを取り囲む柵の一つだった。

彼は鉄の棒を手に取り、器用に槍を回すように片手でブンブンと回
すと・・・・・

突然、回転を止めて構えをとった。

それはよくオリンピックで見るような槍投げの選手の構えと同じだった。

彼の顔が急に真剣になつていく。

まるで全身の感覚を研ぎ澄ますように

私の周りの空気が、

周辺の空気の圧力が彼の構える棒　　いや槍

に集まつていいく……

もうトライアックはどんどん唸り声を上げながら、ひりに突っ込んでいく……

「くたばれええ……」

何故だかそんな倉橋の声が聞こえた気がした。

『お前が自分の憎しみを
断ち切れないなら！！！』

ズツ！！

彼は構えた左足を擦り足で地面に刻む！

『僕は・・・・

全て吹き飛ばす！！！』

そして、彼は右足を踏み出して
！

構えた槍をトラックに向けて投擲した！！！

『いっけええええええええええええ！！！！』

「なつ！？」

運転していた倉橋は驚いた！

まさかトラックに鉄の棒を投げつけてくるなんて事を彼は考えもし
なかつたのだ。

彼から放たれた棒は瞬時にこちらに向かっていき　　！

そして　　！！！

ガツシャヤアアアアン！－！－！

トラックのフロントガラスを突き割つて倉橋の右肩に刺さつた！－！－！

「ぐあつっつっつー－！－！」

突然、身に走る激痛に顔を歪ませた倉橋は

「がつ・・・はつ・・?」

信じられない光景を目にした。

浮いていたのだ。

自分の運転していたトラックが！

地面から数メートルも浮いていた。

やがて痛みのせいで知覚が鈍くなつた倉橋は

すぐさま時間の知覚が戻つていく。

まるでスローから再生へと移るよつこ、

ドオオオオオオオオン！！

その瞬間、

倉橋は全身が後ろに流される感覚と、、

激しくトライク」と地面に叩きつけられる激痛を感じたのだった。

「がつ・・・・・はつ・・・・」

運転席が半壊したトラックに倉橋は血を吐きながら横に倒れていた。右に横倒しとなつたトラックから完全に割れたフロントからゆつくりと抜け出でようとしていた、

だが、彼は右肩に本来あるはずの感覚が無いことに気づいた。

激痛で気づかなかつたが、本来あるはずの存在感が無かつたのだ。

やがて、激痛がなくなつてしまつた。もう身体が脳を守るために痛覚をシャットダウンさせてしまつたのかもしれない。

「あ・・・・・あ・・・・
あああ・・・・・・」

もはや瀕死の重体だつた。

それほど、あの自由人の一撃は凄まじいものだつたのだ。

『まだ、わからないか?』

その時、近くにジャリッといつ足音と共に近くに誰かがいるのを知覚する倉橋だつたが、

「…………」

もはや言葉を明確に紡げない。
激痛、疲労、恐怖・・・
それら全てが絹い交ぜとなつてしまつて正常な思考力を失わせてしまつていたのだ。

『お前が“生きる事”に
頑張つていれば麻里さんも
ああはならなかつたの
かもしけないんだよ』

「・・・・・え」

『あの時、お前は頭を下げて
頼み込んだか?
恥も外聞も捨てて亮君の
お父さんや住民の人達に
懇願したか?』

「・・・・・あ」

『お前は絶望して頭にきて
さつさと出て行つたんじや
ないのか?』

「・・・・・・・・・・・・

『お前、いや

いまの日本人の悪い癖なんだよ。自分の持つているカードは出さずに他人のカードを全て出させようとする。

自分の気持ちを読んで下さい。いや空氣読んで下さいなんてのたまう輩もいる。

日本人は他人を神様扱いするのが好きなんだよ。

でもな、僕達は神様じゃない。エスパーでもないんだ。そんなに何でも読めたりできるわけ無いだろ？

他人にそんな事依存せず、ただただ
我が道を突き進む。
憎しみや嫉妬、そんなもの全てを自分の中に飲み込んでね。』

「・・・・・・・・・・・・

『それが出来なかつた

お前は・・・・・
あの時、公民館から
帰ってきた時に、、、
麻里さんを・・・・・

「・・・・・・・・・！」

倉橋は田を見開いていた。

な、なんでその事をーー！

『兄とそんな形になつて
しまつたのを彼女は
悔いていたんだ。
だからあの日、彼女は
篤君を呼び出した。
だが・・・・・』

「・・・・・・・・・ああ！

ああああああああああーー！」

その時、倉橋は思い出したのだ。

田の前で妹が高台の下へと消えていった記憶を

『おそらく、お前が
現れたことで
彼女は半ばパニックに
なつて

その後、篤君が来たけど
高台の下にいた彼女には
気づかなかつたんだろう

『その後、自分が妹を
追い込んだ記憶を失つて
倒れていたお前は、
気が付いて麻里さんが
自殺したのを知つた。』

「・・・・・」

『お前が執着じやなく
生きる事に捕らわれて
いたら、大切な妹さん
を守れたかもしれない。』

いわば・・・・・

今のお前を生んだんだ！……』

「…………」

もはや言葉にならなかつた。彼は今まで自分のしてきた事を後悔し始めたのだ。

『ごめんな、麻里。

兄ちゃんが弱かつたから

最後の大切なお前さえ守れなかつたんだな……

倉橋は涙を流していた。

あの日、両親達を失つてから流すことのない涙を、

その時、彼の頬に伝わる涙に暖かな手が触れていた。

自由人は彼の近くにしゃがみ込んで倉橋の頬に触れたのだ。

手から暖かな光が発せられる。それはあの時、紗弥加の傷を癒やした光だつた。

『本当はお前の命なんて
見捨てるんだけど……

そうすれば一生後悔する
人がいるからな。』

光はどんどん強くなつていいく。

『 ただし、右腕はそのままに
させてもらつ。』

それはお前が一生をかけて
背負わなければならぬ
罪だと僕は思うよ。』

「・・・・・あ」

彼の右手の光が倉橋の体を包み込んでいく。

『自分がどう進むべき
なのか、

それはこれからよく
考えることだね。』

光が全てを包み込んで・・・・・

暖かな光に包まれて・・・・・

倉橋はやっと本当の安らぎの中で意識を失ったのだった。

parte・20　名前はもう無い

「…………」

私は見ていた。

ボロボロになつたトラックに近付いて這い出た倉橋を助けた彼を、やがて彼は立ち上がると、一いちらを向いて歩いてきた。

「…………」

彼は私から少し離れた所で立ち止まり、笑みを浮かべて言葉をかけてきた。

『よかつた、君を……
みんなを救えて』

「…………」

『ん?』

彼は何かに気づいて後ろを振り返る。

半壊したトラックに警察官が何人か集まりだしてきたのだ。

『そろそろ時間があ』

彼は頭をポリポリとかいて苦笑いをした。

そして、私に向き直ってフツと笑い直す。

「じゃあ、 、 、 、

元気でな恵美ちゃん」

やつぱり・・・

私を知つてたんだね。

でも、どうして貴方は・・・

しかし、彼は私の想いに気づかず、姿勢を少し沈むように囁んでいた。

まるでこの場から飛び去るよう

「待つ・・・・・」

私が叫びました時だつた！

「紘平君！」

彼の後ろからタックルをして飛び込む人影があつた。

『あらつ！？』

彼は反応していたのか急に後ろを振り向いてしまった。

そして

ボフッ！！

飛び込んだ彼女を抱きかかえる形になつてしまつ。

なんとか彼はその体格差を生かして踏みとどまつた。

「さ、紺弥加・・・！」

それはあの時

連れ去られた私の大切な妹、紗弥加だった。

服は何故か黒っぽい長袖を来て いるが、
彼女は小柄のためか袖は何回も捲られて服も下のスカートを半分も
隠してしまつ 長さになつっていた。

「ぐすっ・・・・・！」

今まで私寂しかつたん
だからあ～～！」

そう言つて彼の胸の中で泣きじやくる紗弥加、

だが・・・・・

抱きつかれた彼はなんだか様子がおかしかつたのだ。

『あ、
え、
い、
・・・・・』

「やつぱり、

変わつていなゐわね」

私はニツと笑つて変わらぬ彼に顔を思い出して いた。

昔の記憶を辿ると・・・・・

彼は確かに女性が苦手な筈だ。

昔、いとこのお姉さんに四六時中抱き締められたお陰で、手を触れるのはおろか抱き締められると完全に硬直してしまつ。

特にそのいとこのお姉さんが豊富な胸だったので、紗弥加のような胸はある意味彼の天敵だったのだ。

「でも、私

マキちゃんから聞いた時は
信じられなかつたんだよ！

あの時の水害で
紘平君も死んだって聞いて

「？」

そつか・・・・

だから紗弥加はあんなに悲しそうな顔をしてたんだ。

私はやつと納得していた。

あの時、紗弥加は有井君の死を思い出していたから、同じ様に死んだと聞かされていたこの人、紘平君を思い出していたのだろう。

彼は最初は固まっていたが、その石化状態をなんとか脱して、くつについてくる紗弥加をゆっくり離すと、3歩離れて私達から遠ざかつた。

『ごめん、誰かと勘違いしてないかな?』

「「えつ・・・・?」」

私と紗弥加が異口同音で呟いてしまつ。

『僕はただの自由人だ、

名前はもつ・・・無いよ』

「そ、そんな・・・」

紗弥加の顔がまた沈む。

「そんなわけ・・・
ないじゃない！」

私は大切な妹を暗くさせた彼に言葉をぶつける。

『じめん・・・・

今はまだ・・・・

二人の下には戻れない
んだ。』

もの悲しく、それでいて切ない表情を浮かべる彼に私は声をかけようとした。

でも何かを言おうとした時に周囲の異変に気づいた。

「さうに気づいた警察官が何人か駆け込んでくるのを、

彼は後ろから駆け寄つてくる警官達の足音に気づくと、ポケットから何かを取り出した。

『これ、渡しておいて
くれるかな?』

そう言つて彼は私に取り出したモノを差し出した。

それは金色のカードだった。表には赤い色で“F”と描かれていた。

「これは……?」

『おそらく中西警部が
来ているハズだから
渡してあげて』

「い、紗平君……!」

紗弥加が彼に行かないでと懇願しようとしたが、

彼は後ろに飛び退いて私達から距離をとつていた。

まるで、私達から拒絶するよう

離れた間隔に目に見えない地割れでもあるかのようこ、

『じゃ！2人とも元氣で！！

もし・・・・・

僕が答えを見つけたら、

戻つてくるから！』

そう言つて彼の姿は忽然と私達から消えてしまった。

私が最後に見た彼の表情は・・・・・

どこか嬉しくも
どこか物悲しい・・・

そんな表情だつた

「まつたく、

颯爽と出てきて

後始末は全て俺任せ

・・・・か」

そう言つて彼は手で弄んでいたカードを机に放り投げた。

カードはカラソソッと音を立てて机の上でしづらぐ踊る。

やがてカードは動きを止めて、その表面にあつたFの文字を示していた。

「こは大井町警察署の捜査一課のある分室の一つだ。

その中でも一番の出世頭である中西警視、彼が先程までロビーチだつた男である。

彼はとある事情を経てここに転属となつた。

かつては警視庁に勤務していたが、ある内部政変に敢然と立ち向かって警察の正しさを貫いたのだ。

だが、その余波も大きかった。そのために地方のこの警察署に左遷されてしまった。

しかしながら彼が警視の階級にいる事が自らの正しさを証明していた。

かつて、警察に存在した驚くべき事実。

その際に彼はあの自由人と出会ったのだ。

『ま、このカードがあれば
報告書なんていらないがな

顛末もすべてこいつやって
送つてくるし、』

そう言つて彼は机にあつた封筒を取り出す。

それは真白い封筒だった。宛先は大井町警察署、差出人には“とある自由人より”とだけ。

その封筒の中身は今回の大井町人質籠城事件の全てが書かれていた。

「まったく、いい加減なのか
几帳面なのか、

「アイツはまだ・・・
引きずっているのか。」

そう言つて表情を沈ませる中西警視だった。

警察は封鎖された市民会館が開いた瞬間に踏み込んで、犯人グループの男達を確保した。

もつとも、先に警察病院に全て搬送しなければならない状況だったのだが、

それでも、犯人にも人質にも死者1人も出さなかつた事が救いだつた。

犯人グループのうち、会館の外側を見張つていた連中は警察が周囲を取り囲んだ中で次々と倒されていった。

そう、彼の手によつて

そこから警察は会館に踏み込むことが出来たのだが、警官の1人がトラップに気づいた為、全て解除して犯人グループを確保・救助するのに時間がかかってしまった。

彼らは警官病院に搬送されたが、幸いにも命に別状はなかった。

また、会館にいた犯人グループの男達は全員爆発に巻き込まれた外傷を受けていたが、どうやら治療を受けていたのか外見より軽傷で済んでいたという。

だが、犯人グループのうち2人は重傷を負っていた。

古山紗弥加を襲い乱暴としようとしていた亀山は、警察官が駆けつけた時には瀕死の状態であったが、

警察官が運び出そうとした際に彼が現れ、命だけを助けたという。

だが、いまだに意識不明の状態にあり

医者の話では脳波がかなり微弱にまで落ち込んでいる事から、今後、目覚める事はないだろうと推測しているという。

そして

主犯格の倉橋 友彦はあの時に爆弾や部下を運び込んだトラックを暴走させ

彼に再び止められた。

倉橋は右肩から腕を断裂されていたが、彼の治療により一命を取り留めていた。

今でも警察病院で治療中である

だが、倉橋は全ての事件は自分が主犯であると容疑を認め、

「あの時、できなかつた“生きる事”をやる事でいつか家族達の墓を作つて、祖父や父のしてきた事を償つまで諦めない。」

と、潔く服役すると私に話してくれた。

「 誰一人、
命に関わる犠牲を
出さないまま、、か。」

そう言って中西警視はフツと笑つてタバコに火を点けた。

「これがお前の答え
・・・か」

タバコをくわつつ部屋の窓へと歩いていった中西警視は窓口に佇んでいた。

「あの事件からもう数年、
自由人としてお前は
世界を旅しているのか？」

あの時、俺に言つた答えを探るために・・・

浦上紘平・・

いや・・・・・

かつてfinal answerと
呼ばれた自由人よ」

紫煙で辺りを曇らせながら、中西警視は口にあるタバコを手にとつ、

ふーっと息を吐いた。

「え、 ハミ

お姉ちゃん（涙）」

「もひく、 、

そんなに泣かないの」

あの事件から数日後に私達はまた大井駅に来ていた。

無論、私が勤務先の学校に帰らなければならぬいためだ。

あの事件にあつたことがわかつて、私の同僚の先生が氣を使ってくれて、2～3日長くこもる事が出来たのだ。

両親も本当に心配してくれた。無事戻ってきた時は2人揃つて抱き締められた。

子供の頃からなかつた抱擁に私は顔が赤くなる程照れてしまった。

警察の事情聴取があると思つていたが・・・・・

「大井警察署の中西と申します。

あなたに事情を伺いたいのですが

・・・・・

「あ、あの中西警部さんですか？」

「警部？」

いや、だいぶ前に警視になつたのですが。」

「あ、あの・・・・・私達を助けた方からこれを渡すようにと、」
「・・・・・これは！
なるほど、あいつが皆さんを助けたのですか・・・・」

「あ、あの・・・・・
刑事さんは彼の事を？」

「ええ、友人ですよ。
共に戦つた仲間・・・・

ですか・・・

「や、それじゃ・・・・

彼の名前はなんて

「申し訳ないが、彼が名乗らなかつたのなら私もお教えする事は出来ないんですよ。」

「えつ・・・・・・

「彼は・・・・・そう、私達警察でもかなわない程の権限を持つていまして

申し訳ありませんが

・・・・・・

「そう・・・ですか

「今回の事件の聴取は行わない事になるはずです。安心してゆっくり休んで下さい。」

「え、でも・・・・・

「あいつなりの優しくなんです。」

わかつてやつて下せー」

あれから、中西警視はおろか警察の関係者やマスコミさえ誰一人来ていなかつた。

事件は発生した当時はテレビのニュースで騒がれたが、解決した次の日には新聞やテレビでは扱わなくなつた。

インターネットではどこから情報が漏れたのか、事件にある男が颶爽とあらわれて解決した事で賑わつてゐるらしい。

お陰で私や紗弥加、そして同級生のみんなはゆっくりと事件によつて負わされた傷みを早くも癒すことが出来た。

阪本君から聞いた話だと、佐古川君はあれから病院に搬送されたが、初期治療が完璧だった為早く退院する事が出来るそつだ。

彼のおかげなのだろう。

私は別れで顔が大洪水になつている妹分を優しく抱き寄せて髪を撫でながらそんな事を振り返つていた。

プロロロロロロロロロロロロロロロ

私が乗る電車がもうすぐ発車するみたいだ。

私は可愛い妹をゆっくりと離して彼女の顔を覗き込む。

「紗弥、紘平君に会いたい？」

「・・・・・

「うん」

まだ顔を曇らせたままの紗弥加は子供のような素直さを見せたまま小さく頷く。

「 もう・・・・・

「こんな可愛い子を泣かせたまま、消えちやうなんて」

言つてから笑いかける私

「姉として、しつかりとお仕置きをしなきゃね

「 ハハお姉ちゃん。」

私は少しだけ笑顔が戻った妹から離れて手荷物を持って電車に乗り込んだ。

「HIIお姉ちゃん！」

私は可愛い声に動きを止めて、ふっと振り返った。

「もう少ししたら学校も
夏休みだから、私

妹分の紗弥加の顔を向かって笑顔を向ける。

「クラスを受け持つてない
から長く帰つてこれるわ」

紗弥加の顔に「？」の文字が浮かぶ。

「その時に・・・
彼を2人で探そう。」

「・・・！」

「お、お姉ちゃん！？」

私の突然の提案に驚く紗弥加、

「今の女の子は待つて
ばかりじゃ駄目よ。

「うちから捕まえに
行かなきや！」

「…………うん！」

そう言つ紗弥加の笑顔は今までに見たことないような輝く表情だつた。

「見つけたら頼むわよ？
紗弥加の胸なら彼だつて
イチコロだから」

「あ～～っ！

また胸の事言つた～！」

「フフフッ」

プロロロロロロロ・・・・・

そろそろドアが閉まるかな・・・・・

私は紗弥加に手を振つて別れを告げた。

「それじゃ、紗弥加

またね

「うんっ！」

HIIお姉ちゃんも！」

プシュー――――――

2人の間をドアが閉まつていった。

私は紗弥加と別れた後、動き出した電車の中を歩いて空いた座席へと腰を下ろした。

右側の座席に座つて窓から流れる景色を呆然と見つめる。

懐かしく、着実と変わっていく故郷の景色。

私はただ何も考えずに眺めていた。

その時だった

私は不可思議な光景を目にしたのだった。

流れしていく風景の中に、水良川を包むような堤防があった。

そこに1人の人影を見ていた。

その人影はまるでこちらを見ているようだった。

そして、その人影は一ちらに向かって手を振っていた。

「　　！」

私は何かに弾かれたように窓に食いついていた。

でも

その時には誰も堤防にはいなかつたのだ。

「・・・・・」

私はしばらく呆然としていたが、

やがて心の中にあるやる気の炎が沸々と燃えていくを感じていた。

あなたが答えを見つけるまで待っているほど、私も紗弥加も大人しい女じゃないわよ。

必ず私達からあなたを見つけてやるんだから！

だから覚悟してね

自由人さん

そんな決意を私は流れゆく景色を見ながら心の内で彼に伝わるよう
に叫んでいた。

「…………」

「おの話はいいがでじや

「え～～～」

それでH//お姉ちゃんは
お兄ちゃんは余ったの?」

「わあのう、でもこの
お話には続きがあるの
じやが……」

「おのの～～お姉ちゃん」

「やの続もせ・・・
ど」にしつたかのう

「え～～～」

「また探しとおくかの、
おや～～もつこんな時間じや

お嬢ちゃんは早く
お家に帰る

「ほんとだ。もつ外が
オレンジ色だ。」

じゅあ、お爺ちゃん、
またお話を聞かせてね。」

「ああ、また気が向いたら
おこで」

「それじゅ、わがつなり
お爺ちゃん」

「ああ、わがつなり」

バタン・・・・・

「・・・・・
とつあべや、お話を
おしおこじゅ、

次はどんなお話を
聞くかせてやるつかのう」

「じゅこじゅ、わ
また本を探して
みよつかのう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5134p/>

自由人、finalarwin!!

2011年8月24日17時19分発行